㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第182集

飯土井上組遺跡
波志江中峰岸遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

建設省
群馬県教育委員会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料 文化財調査室 No. 96-4784 平成9年3月25日
아-330
28
(6)

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第182集

飯土井上組遺跡
波志江中峰岸遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

建設省
群馬県教育委員会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・併用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行なわれています。

本書は、昭和60年9月より12月にかけて発掘調査しました伊勢崎市波志江町所在の波志江中峰岸遺跡、同年12月より昭和61年6月にかけて発掘調査しました前橋市飯土井町所存の飯土井上組遺跡の報告書です。両遺跡は小規模なしかも調査された遺構も少ない遺跡ですが、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜わりました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成7年2月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例　　言

1．本報告書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い事前に発掘調査された、事業名称「ＪＫ25　波志江中峰岸遺跡」・「ＪＫ31　飯土井上組遺跡」の発掘調査報告書である。

2．波志江中峰岸遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町に所在する。
飯土井上組遺跡は、群馬県前橋市飯土井町に所在する。

3．事業主体　建設省関東建設局

4．調査主体　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間　波志江中峰岸遺跡　1985年９月１日～11月30日
飯土井上組遺跡　　1985年12月１日～1986年６月30日

6．調査組織
常務理事　白石保三郎　事務局長　梅沢重昭　調査研究部長　上原啓己　管理部長　大沢秋良
事務担当　定方隆史、国定　均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、吉田恵子、並木綾子
調査担当課長　調査研究第２課長　桜場一寿
調査担当　調査研究員　飯田陽一、調査研究員　新倉明彦、調査研究員　丸山(田村)公夫

7．整理主体　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

8．整理期間　1993年４月１日～1994年３月31日

9．整理組織
常務理事　中村英一　事務局長　近藤　功　調査研究部長　神保侑史　管理部長　佐藤　勉
事務担当　斎藤俊一、国定　均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津　茂、高橋定義、松下登、吉田恵子、角田みづほ、松井美智子、塩浦ひろみ、今井とも子
整理担当課長　調査研究第２課長　能登　健
整理担当　主任調査研究員　神谷佳明(編集・執筆)、主任調査研究員　新倉明彦
整理補助　嘱託　鈴木幹子、青木静江、補助員　高橋順子、嶋崎しづ子、阿部幸恵、角田孝子、小久保ヒロミ、高田栄子、田村栄子、高橋フジ子、原島弘子、木暮芳枝
機械実測　伊藤淳子、尾田正子、筑井弘子、戸神晴美、佐子昭子、千代谷和子
保存処理　主任技師　関　邦一、嘱託　北爪健二、補助員　小材浩一、樋口一之
遺物観察　石器　主任調査研究員　岩崎泰一、縄文土器　主任調査研究員　山口逸弘

10．写真撮影は、遺構については発掘調査担当者、遺物ついては主任技師　佐藤元彦が行った。

11．遺物と人骨の分析・同定にあたっては、下記の方々に依頼した。
石材同定　群馬県地質協会　飯島静雄、人骨鑑定　群馬県立大間々高等学校教諭　宮崎重雄
樹種・種子　株式会社パレオ・ラボ

12．出土遺物、撮影写真、遺構図、遺物図、その他記録等は、一括して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管・管理している。

13．発掘調査、整理にあたっては、諸機関、諸氏より貴重なご教示、ご指導をいただいた。

14．発掘調査にあたっては、地元伊勢崎市と前橋市から多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡　　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．遺構図の縮尺につては、挿図中にそれぞれスケールを明示したので参照されたい。

3．遺物図の縮尺は、原則的に1：3であるが、異なるときはそれぞれ縮尺を明記してある。

4．遺物写真は、おおむね遺物図と同様の縮尺で掲載している。

5．本報告書で掲載した地形図は下記のとおりである。

　国土地理院　1：200,000　「宇都宮」、1：50,000　「前橋」

6．遺構図の面積は、デジタルプラニメーターで3回計測した平均値を採用した。

7．観察表の量目の番号は、下記のとおりである。

　①　口径、②　底径、③　器高

8．遺物観察表の色調は、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人　日本色彩研究所色票監修「新版　標準土色帖」に拠った。

目　　次

第１章　調査の経過

1．調査に至る経緯…… 3
2．調査の経過…… 4
3．基本土層…… 6

第２章　飯土井上組遺跡

1．住　居　跡…… 8
2．掘立柱建物跡……27
3．土　坑　墓……28
4．土　　坑……32
5．集　　石……35
6．井　　戸……35
7．溝……38
8．畠　　跡……44
9．遺構外出土遺物……47

第３章　波志江中峰岸遺跡

1．溝……49
2．水　田　跡……49
3．遺構外出土石器……56

第４章　分析・鑑定

1．飯土井上組遺跡１号土坑墓出土の人歯・骨……58
2．飯土井上組遺跡の炭化材樹種同定と炭化種実同定……59

観　察　表

飯土井上組遺跡……63
波志江中峰岸遺跡……71

図　　版

挿図目次

第1図　遺跡位置図……2
第2図　遺跡位置図……3
第3図　飯土井上組遺跡調査範囲図……5
第4図　波志江中峰岸遺跡調査範囲図……5
第5図　飯土井上組遺跡基本土層位置図・基本土層図……7
第6図　1号住居跡使用面……8
第7図　1号住居跡出土遺物分布図……9
第8図　1号住居跡竈・竈掘り方……9
第9図　1号住居跡出土遺物……10
第10図　2号住居跡使用面……11
第11図　2号住居跡出土遺物分布図……12
第12図　2号住居跡新竈・新竈掘り方……12
第13図　2号住居跡旧竈・旧竈掘り方……13
第14図　2号住居跡出土遺物(1)……13
第15図　2号住居跡出土遺物(2)……14
第16図　3号住居跡使用面……15
第17図　3号住居跡出土遺物分布図……16
第18図　3号住居跡掘り方……17
第19図　3号住居跡出土遺物(1)……17
第20図　3号住居跡出土遺物(2)……18
第21図　4号住居跡使用面……19
第22図　4号住居跡出土遺物分布図……20
第23図　4号住居跡掘り方・土層註記……21
第24図　4号住居跡遺物集中地点・炉跡……22
第25図　4号住居跡出土遺物(1)……23
第26図　4号住居跡出土遺物(2)……24
第27図　4号住居跡出土遺物(3)……25
第28図　5号住居跡使用面・出土遺物……26
第29図　6号住居跡使用面……26
第30図　1号掘立柱建物跡平面・エレベーション……27
第31図　1号土坑墓平面・エレベーション……28
第32図　1号土坑墓出土遺物(1)……28
第33図　1号土坑墓出土遺物(2)……29
第34図　1号土坑墓出土遺物(3)……30
第35図　Ⅰ区1～4号土坑平面・出土遺物……32
第36図　Ⅱ区1号・Ⅲ区1～17号・Ⅳ区1～3号土坑……33
第37図　Ⅳ区4～6号・Ⅴ区1～9号土坑……34
第38図　1・2・3・5・7号集石……35
第39図　集石全体図……35
第40図　Ⅵ・3号井戸平面・セクション……36
第41図　Ⅴ区2号井戸平面・出土遺物……37
第42図　Ⅰ区1号・2号・3号溝……38
第43図　Ⅱ区1号・Ⅱ区2号溝出土遺物……39
第44図　Ⅱ区2号・Ⅲ区1号・2号溝・出土遺物……40
第45図　Ⅴ区1号溝出土遺物……41
第46図　Ⅴ区2・3号溝・出土遺物……42
第47図　Ⅴ区4号溝・出土遺物……43
第48図　Ⅳ区1号鳥跡・出土遺物……44
第49図　Ⅴ区1号鳥跡……45
第50図　Ⅴ区2号鳥跡・出土遺物……46
第51図　遺構外出土遺物石器(1)……47
第52図　遺構外出土遺物石器(2)……48
第53図　遺構外出土遺物土師器・鉄器……49
第54図　中峰岸Ⅰ区1号・14～17号溝……50
第55図　中峰岸Ⅰ区18・19号・Ⅱ区3号溝……51
第56図　中峰岸Ⅱ区4号・Ⅲ区13・14号溝……52
第57図　中峰岸Ⅰ・Ⅱ区水田跡……53
第58図　中峰岸Ⅲ区水田跡……54
第59図　中峰岸Ⅰ～Ⅲ区水田跡出土遺物……54
第60図　遺構外出土遺物石器(1)……55
第61図　遺構外出土遺物石器(2)……56

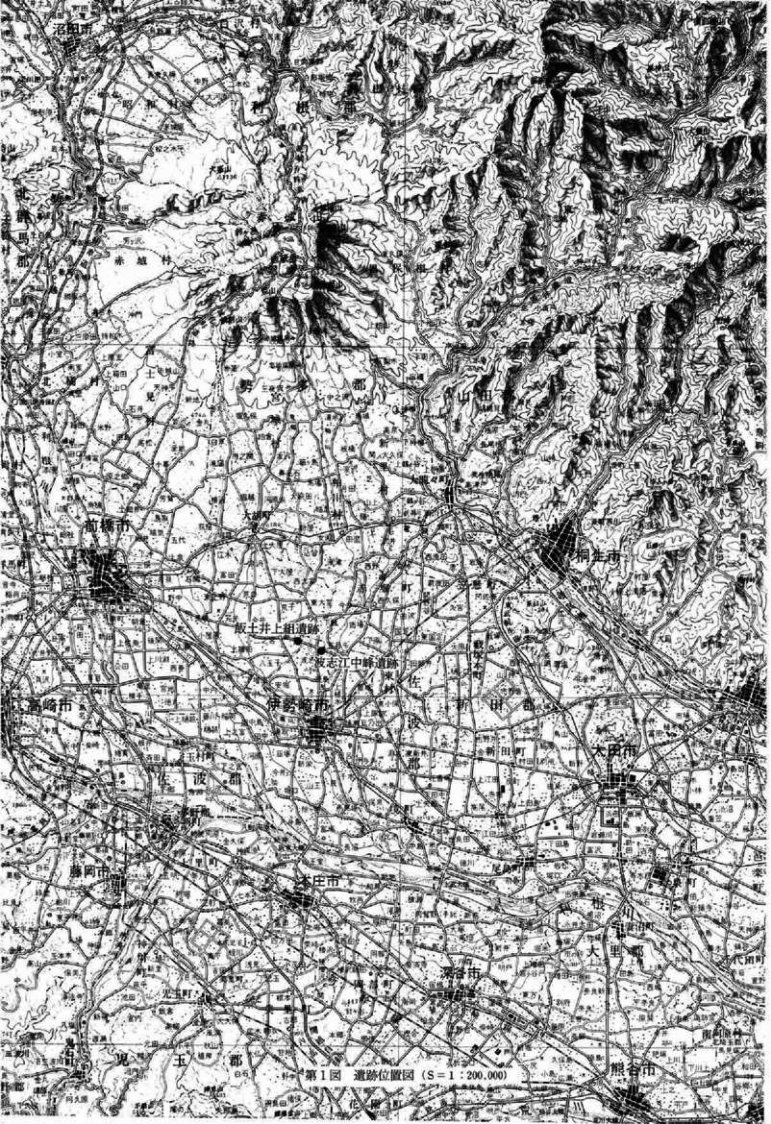
図版目次

飯土井上組遺跡
PL1　遺跡地周辺航空撮影
PL2　遺跡全景（Ⅲ～Ⅴ区）
PL3　Ⅲ区1号住居跡
PL4　Ⅲ区2号住居跡
PL5　Ⅳ区3号住居跡
PL6　Ⅳ区4号住居跡
PL7　Ⅳ区4号住居跡遺物出土状態・焼土断面
PL8　Ⅳ区5号住居跡・土層断面・遺物出土状態
PL9　Ⅳ区6号住居跡・土層断面
PL10　Ⅳ区1号掘立柱建物跡・Ⅳ区1号土坑墓
PL11　Ⅰ区1～4・Ⅱ区1・Ⅲ区1・2号土坑・Ⅳ区土坑群全景
PL12　Ⅳ区1・2・3・4・5・6・Ⅴ区1号土坑・Ⅴ区土坑群全景
PL13　Ⅴ区2・3・4・5・6・7・8号土坑・Ⅳ区1号集石
PL14　Ⅳ区1・2・3・5・7号集石・集石群全景
PL15　Ⅴ区1・2・3号井戸・土層断面・遺物出土状態
PL16　Ⅰ区1・2・Ⅱ区1・2号溝
PL17　Ⅴ区1・2・3・4号溝
PL18　Ⅳ区鳥・Ⅴ区1・2号鳥
PL19　1・2号住居跡出土遺物
PL20　2・3号住居跡出土遺物
PL21　4号住居跡出土遺物
PL22　4号住居出土遺物
PL23　4・5号住居・1号土坑墓出土遺物
PL24　1号土坑墓・Ⅰ区4号土坑・Ⅴ区2号井戸出土遺物
PL25　Ⅱ区2・Ⅲ区1・Ⅴ区1・3・4号溝出土遺物
PL26　Ⅳ区1・2号鳥跡・遺構外出土遺物
PL27　遺構外出土遺物

波志江中峰岸遺跡
PL28　調査区全景
PL29　遺跡発掘調査前状況・調査区全景
PL30　Ⅱ区6～9・11号、Ⅲ区12・13号溝
PL31　Ⅰ・Ⅱ区水田跡全景
PL32　水田跡畦等
PL33　水田跡畦等
PL34　水田跡出土遺物、遺構外出土石器
PL35　遺構外出土石器

飯土井上組遺跡
PL36　炭化材の樹種顕微鏡写真
PL37　炭化種実拡大写真

波志江中峰岸遺跡
飯土井上組遺跡



第1図　遺跡位置図（S＝1：200,000）

第1章　調査の経過

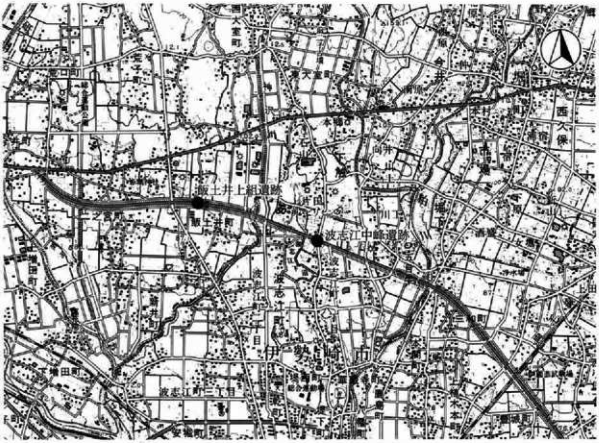
1．発掘調査に至る経緯

建設省は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、東京～大宮～前橋間に大規模バイパスの建設を実施している。上武国道はその一環として計画されたもので、深谷バイパスの上武インターチェンジ（深谷市東方）を起点として利根川を渡って群馬県新田郡尾島町に入り佐波郡境町、佐波郡東村、伊勢崎市を通って前橋市の北方に位置する田口町で現在の一般国道17号に取り付く全長41.4kmの道路である。

上武道路の都市計画は、1971（昭和46）年３月に尾島町～伊勢崎市内、1983（昭和58）年３月に前橋市の一般国道50号までの決定が行われた。

これに伴い県教育委員会は、1970（昭和45）年度に開発諸事業との調整を図る資料として道路計画路線を中心に幅２kmの地域で埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、地域内では472カ所の遺跡が確認された。

発掘調査は、1974（昭和49）年１月より実施された。当初は、県教育委員会文化財保護課において１班体制で実施されたが、1978（昭和53）年に（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立されると発掘調査は、事業団に移行された。その後、道路工事の進捗状況に併せて1984（昭和59）年度から３班、1985（昭和60）年度から４班編成へと発掘調査の体制を対応させた。そして1988（昭和63）年度までに上武道路内に所在する38カ所の遺跡の発掘調査を実施した。



第２図　遺跡位置図（S＝１：50,000）

２．調査の経過

飯土井上組遺跡

本遺跡の発掘調査は、1984(昭和59)年に試掘調査を実施し、調査範囲を確定した。その結果は、上武道路センター杭№955から№971までの320mの区間で遺構が確認された。

本発掘調査は、昭和60年度の1985(昭和60)年12月１日から1986年(昭和61)年３月31日と昭和61年度の1986年(昭和61)年４月１日から６月30日の７カ月間実施し、上武道路域の20,000㎡を行った。

発掘範囲には、用地を横断するように道路や水路が位置しており５地点に分断されているため、これらの区画を東からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区と呼称することとした。

昭和60年度の発掘調査では、Ⅰ区からⅢ区の３区画について行い平安時代の住居跡や土坑、溝を検出、調査した。

昭和61年度の発掘調査では、ⅣとⅤ区の２区画について行い古墳時代の住居跡や土坑、溝、畠跡を検出、調査した。

飯土井上組遺跡調査抄録

昭和60年度
1985年
12月１日　発掘調査準備
　11日　Ⅲ区より表土掘削開始
　　～26日　遺構検出作業
1986年
１月７日　遺構検出、確認作業
２月４日　Ⅱ区As-B層の掘削作業
　　As-B層下面の遺構確認作業
　６日　Ⅰ区谷地状部分調査
　７日　Ⅱ区As-B層下水田跡調査
　14日　Ⅰ区溝、土坑調査
　19日　Ⅰ区遺構確認面下試掘調査
３月４日　ⅡAs-B層下水田跡耕土掘削
　７日　ⅡAs-B層下水田跡耕土下面遺構確認
　10日　Ⅲ区土坑調査
　15～16日　現地説明会
　　Ⅲ区住居跡調査
　17日　Ⅱ区、Ⅲ区溝調査
　31日　本年度の調査終了
昭和61年度
４月上旬　本年度の発掘調査準備
　24日　Ⅳ区、Ⅴ区表土掘削
５月９日　遺構検出作業
　13日　Ⅴ区溝調査
　19日　土坑群調査
　27日　空中写真撮影
６月３日　Ⅳ区遺構検出作業
　４日　畠跡調査
　５日　Ⅳ区住居跡調査
　30日　調査終了

波志江中峰岸遺跡

本遺跡の発掘調査は、1984(昭和59)年に試掘調査を実施し、調査範囲を確定した。その結果は、上武道路センター杭№859から№869までの230mの区画で遺構が確認された。

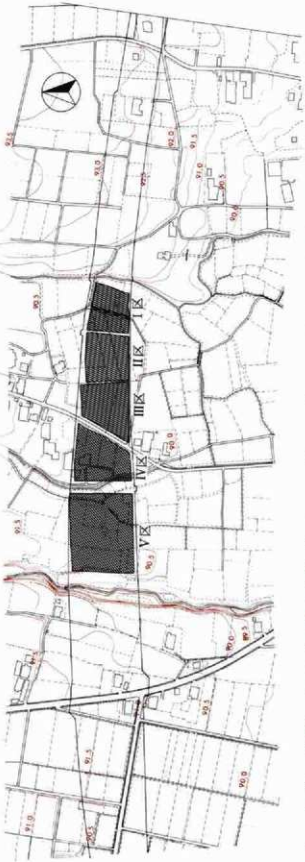
本調査は、昭和60年度の1985(昭和60)年９月２日から12月14日までの３カ月半実施し、上武道路域の8,400㎡を行った。

発掘範囲には、用地を横断するように道路や水路が位置しており３地点に分断されているため、これらの区画を東からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼称することとした。

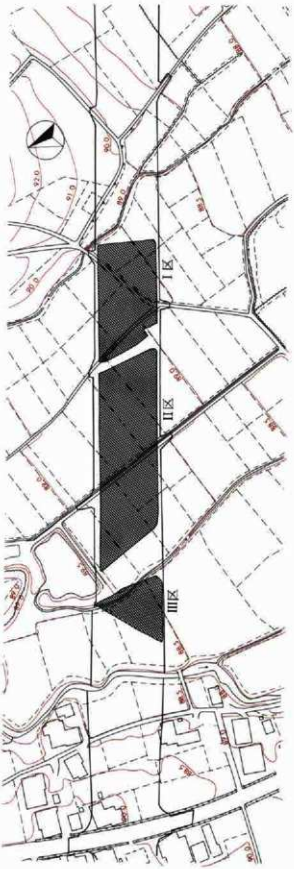
発掘調査は、道路建設工事の日程から西のⅢ区から東へと順次行い、平安時代以降の溝や水田跡を検出、調査した。

波志江中峰岸遺跡調査抄録

昭和60年度
1985年
９月18日　発掘調査開始
　19日　調査区設定
　20日　表土掘削
10月１日　遺構検出作業
　２日　Ⅰ区東端のローム堆積地の溝調査
　４日　〃　　〃　　のローム層中試掘調査
　　ⅡAs-B層下水田跡調査
　14日　Ⅲ区遺構検出作業
　16日　ⅢAs-B層下水田跡調査
　25日　ⅠAs-B層下水田跡調査
11月８日　調査区全景空中写真撮影
　11日　Ⅰ区、Ⅱ区遺構測量開始
　30日　発掘調査終了



第3図　飯井上組遺跡調査範囲図



第4図　波志江中峰岸遺跡調査範囲図

３．基本土層

飯土井上組遺跡

本遺跡は、赤城山南麓の端部に位置し、この付近は小河川や湧水による細かな侵食を受けた小規模な沖積地と低台地とが複雑に入り組む地形が見られる。

飯土井上組遺跡では、Ⅰ区とⅡ区の東側が飯土井中央遺跡から続く沖積地、Ⅱ区の西側、Ⅲ区、Ⅳ区が微高地に立地し、Ⅴ区とその西側は、江竜川の氾濫原・旧河道にあたることが試掘調査の結果明らかになった。

第５図の基本土層のうち土層柱状図№１とが沖積地、№２が沖積地と微高地の境、№３が微高地、№４と№５が旧河道にあたる。

沖積地・微高地の土層は、上部より１が現在の耕作土層、２が褐色土層、３が浅間山Ｂ軽石(As-B)層で５～10cmの堆積が見られる、４が黒色粘質土層、５が浅間山Ｃ軽石(As-C)が混じった黒褐色土層、６が黄褐色パミス層、７が黒色粘質土層、８が斑鉄の見られる黒灰色土層、９が沖積地では黄褐色粘質土層、微高地ではローム層、10が細かい灰色砂層、11が粗い灰色砂層、13が砂礫層。

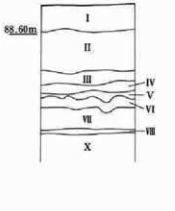
旧河道の土層は、①が礫混じりの埋土、②が軽石を若干含む黒褐色土層、③が斑鉄が見られる赤褐色土層、④がAs-Cを含む褐色粘質土層、⑤黄褐色砂質土層、⑥が灰褐色シルト層、⑦が粗い砂層、⑧が細砂をラミナ状に含む暗灰色粘質土層、⑨粗い砂層、⑩黄色砂層、⑪黒色粘質土、⑫灰色シルト層。

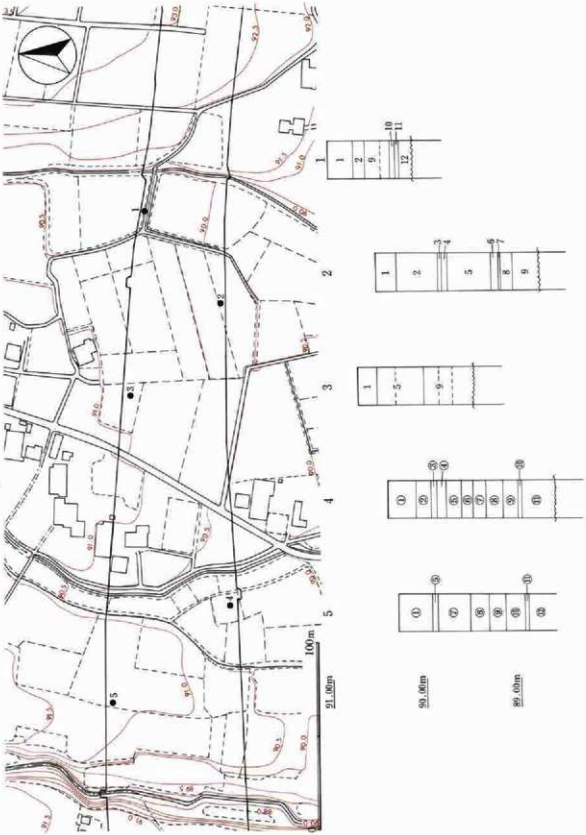
波志江中峰岸遺跡

本遺跡は、赤城山南麓の端部に位置し、この付近は小河川や湧水による細かな侵食を受けた小規模な沖積地と低台地とが複雑に入り組む地形が見られる。波志江中峰岸遺跡でもⅠ区の北東隅で僅かにローム層の堆積が確認されたが、この地点の他は西桂川左岸の沖積地に立地している。

基本土層は、Ⅰ区の中程の地点で観察した。

土層は、上部よりⅠが現在の耕作土、Ⅱが浅間山Ｂ軽石(As-B)と榛名山二ツ岳噴出軽石(ＦＰ)を若干含む暗褐色土層、ⅢがAs-Bを含め暗褐色砂質土層、ⅣがⅢよりやや褐色を帯びた暗褐色砂質土層、ⅤがAs-Bを多く含む暗褐色土層、ⅥがAs-B層で平均10cmの堆積が見られる、ⅦがAs-B層下水田跡の耕作土であった黒色土層、Ⅷがシルト質の黒色土である。





第5図　飯井土上組遺跡基本土層位置図・基本土層図

第２章　飯土井上組遺跡

１．住　居　跡

１号住居跡

本住居跡は、Ⅲ区中央の南よりに位置し、他の遺構との重複関係は見られない。

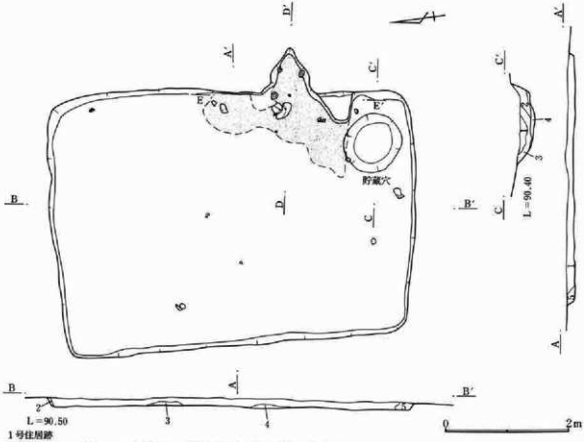
形態は、南辺より北辺がやや長いもののほぼ長方形を呈する。主軸方向は、北から東へ88°を指す。規模は東西が5.78m、南北が4.17mであるが、北辺は4.00m、南辺は3.80mで床面積は21.4m²を測る。壁は、確認面から床面までが９～12cmと浅いため傾斜等の状況は不明瞭であるが、ほぼ垂直に立ち上がると想定される。

内部の施設は、柱穴や周溝は検出されなかったが、貯蔵穴が東南隅から検出された。貯蔵穴はほぼ円形を呈し、規模は径90×80cm、深度29cmである。床面は多少の凹凸は見られるがほぼ平坦である。

竈は、東壁の中央よりやや南よりに構築されている。規模は全長1.16m、幅1.65mで焚口幅が0.70mである。袖は凝灰岩を芯に使用して明褐色土等で構築されている。煙道は壁外に延びる。

出土遺物は、土師器杯、甕、須恵器杯、椀、長頸壺、砥石等が出土しているが、その大部分は竈や貯蔵穴の周辺に集中している。また、出土レベルも確認面から床面が浅いこともあるがほとんど床面や床面より５cm内外である。

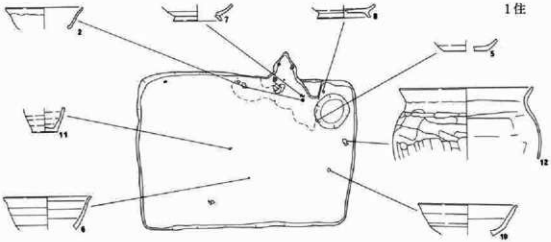
本住居跡の時期は、出土遺物から９世紀初頭に比定される。



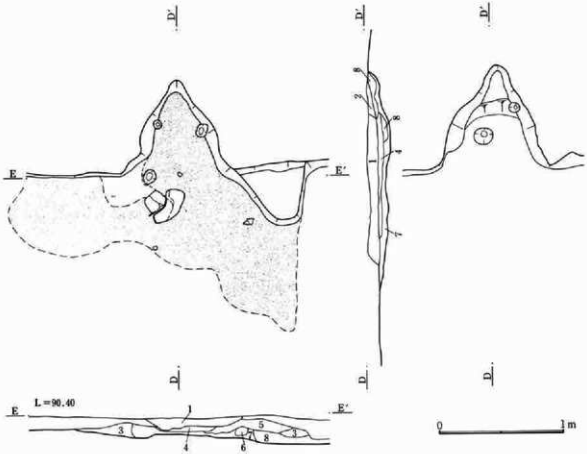
１号住居跡
１暗褐色土　φ0.5～１cmの白色軽石及び褐色軽石を多量と炭火粒及び焼土を含む
２褐色粘質土　白色軽石粒子を含む
３暗褐色土　１と同様であるが、若干黒色味が強い、褐色軽石粒の混入は少ない
４黒色土　白色軽石粒子含む、粘性有り
５黒色土　粘性土

１号住居跡貯蔵穴
１黒褐色土　シルトと上面に焼土粒を含む
２黒褐色土　１と同様、焼土は含まない
３暗褐色土　シルトを多量に含む
４暗黄褐色土　貯蔵穴壁面のローム土の流れ込み

第６図　１号住居跡使用面

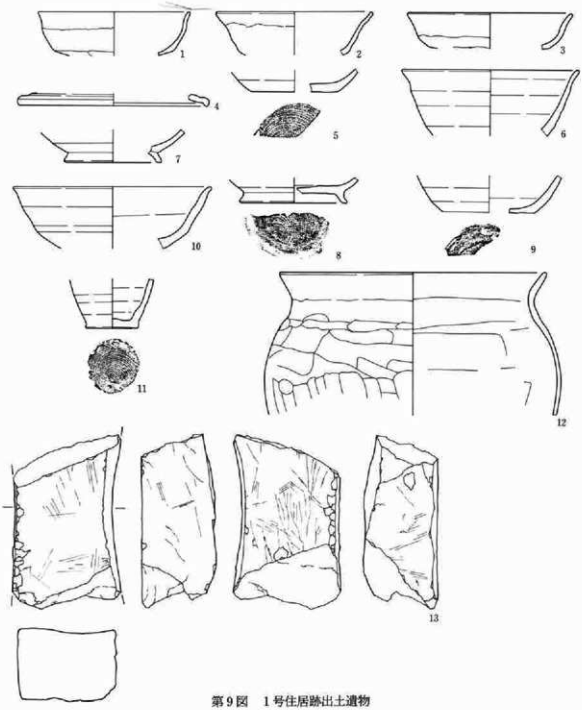


第7図　1号住居跡出土遺物分布図



1号住居跡竈
1 暗褐色土　φ1～3mm程のFPを多量と炭火物を含む
2 暗褐色土　1に類似、焼土粒子と焼土ブロックを含む
3 暗褐色土　φ1～3mm程のFPを含む
4 黒褐色土　灰、炭火物層、若干焼土粒を含む
5 明褐色土　砂質凝灰岩、FPを含む
6 明灰褐色土　FPを含む
7 暗褐色土　FP、焼土粒を若干含む
8 暗褐色土　焼土粒、炭火物を多量に含む

第8図　1号住居跡竈・竈掘り方



第9図　1号住居跡出土遺物

2号住居跡

本住居跡は、Ⅲ区南よりで1号住居跡の西北に位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

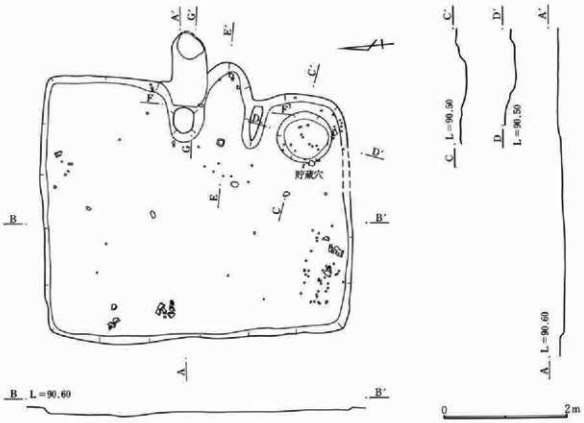
形態は、東辺が竈部分で若干の段差をもつがほぼ長方形を呈す。主軸方向は1号住居跡と同様で北から東へ90°を指す。規模は長軸4.60m、短軸4.20mで北辺が^{2}4.03m、南辺が3.68mで床面積17.3m²を測る。壁は、確認面から床面までが6～10cmと浅いため立ち上がりの状態などは不明である。

内部施設は、柱穴、周溝は検出されなかったが南東隅より貯蔵穴が検出された。貯蔵穴は楕円形を呈し、規模は径88×80cm、深度20cmである。床面は多少の凹凸は見られるがほぼ平坦である。

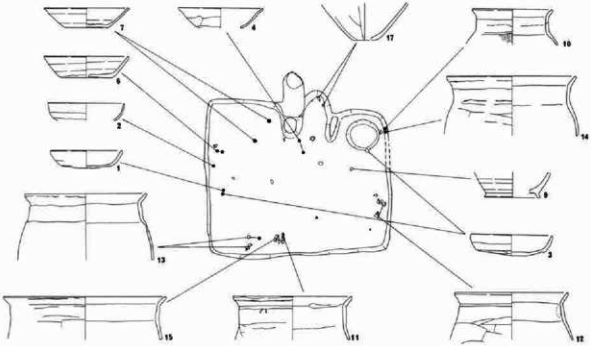
竈は、東壁の中央付近に構築されているが、煙道部分が重複して2カ所見られることから当初の竈を南側に再構築している。新しい方の竈の規模は、全長1.60m、幅1.32mで焚口幅が^{2}0.60mである。袖は、黄褐色土で構築され、左側は一部地山を残している。袖幅が左側が^{2}60cm、右側が30cmである。煙道は壁外に延びる。古い方の竈は、袖・焚口部分が新しい方の竈の構築により壊されているため煙道部分が残存するだけであるが、残存部分での規模は全長1.00m、幅0.70mである。袖は、掘り方の状態から別の土砂によって構築されていたようである。煙道は新しい方の竈と同様に壁外に延びる。

出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・椀等が出土している。遺物の出土は、竈の周辺と貯蔵穴、壁際に多く見られ、床面直上及び数cm上からの出土である。

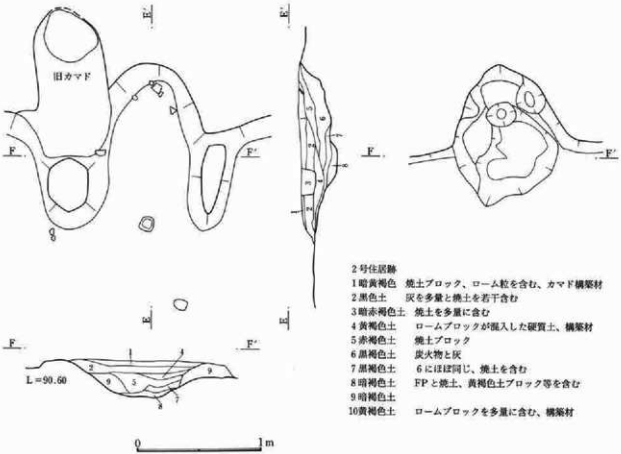
本住居跡の年代は、出土遺物のなかに土師器「コ」の字状口縁甕が見られることから9世紀中頃に比定される。



第10図　2号住居跡使用面

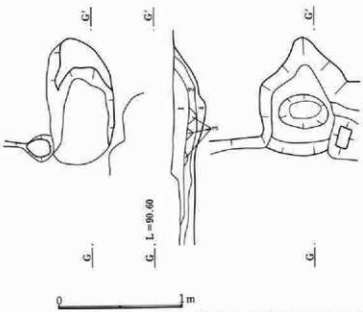


第11図　２号住居跡出土遺物分布図



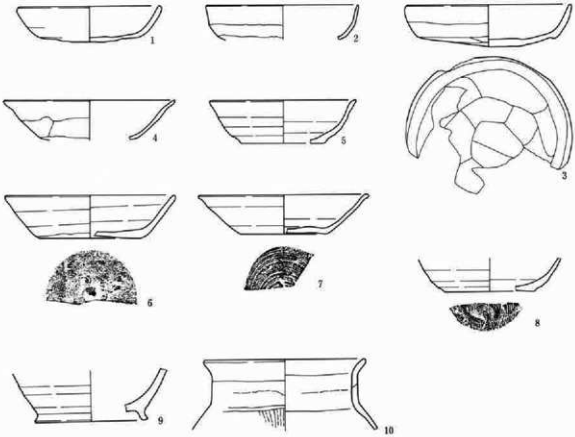
２号住居跡
１暗黄褐色　焼土ブロック、ローム粒を含む、カマド構築材
２黒色土　灰を多量と焼土を若干含む
３暗赤褐色土　焼土を多量に含む
４黄褐色土　ロームブロックが混入した硬質土、構築材
５赤褐色土　焼土ブロック
６黒褐色土　炭火物と灰
７黒褐色土　６にほぼ同じ、焼土を含む
８暗褐色土　FPと焼土、黄褐色土ブロック等を含む
９暗褐色土
10黄褐色土　ロームブロックを多量に含む、構築材

第12図　２号住居跡竈・新竈掘り方

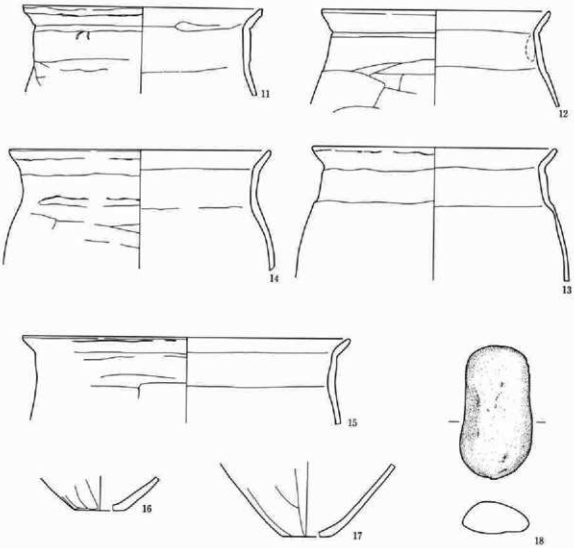


2号住居跡旧竈
1暗黄褐色土　ロームブロック、焼土粒を含む、竈構築材か
2黒色土　灰、焼土を含む
3明赤褐色　焼土を多量に含む

第13図　2号住居跡旧竈・旧竈掘り方



第14図　2号住居跡出土遺物(1)



第15図　２号住居跡出土遺物（２）

３号住居跡

本住居跡は、Ⅳ区北よりの中ほどに位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

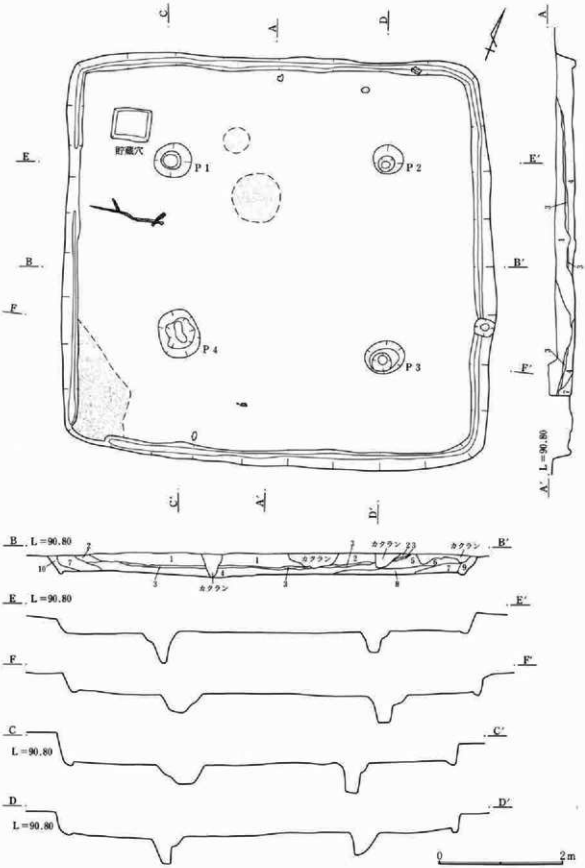
形態は、ほぼ方形を呈す。主軸方向は北から西へ16°を指す。規模は長軸6.78m、短軸6.52mで床面積37.3m²を測る。

壁は、確認面から床面まで20～46cmでやや傾斜をもちながら立ち上がる。

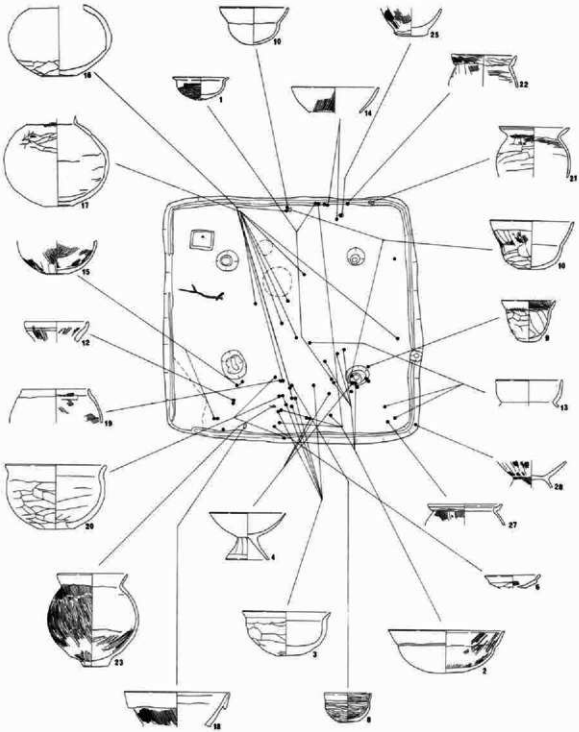
内部施設は、北西隅から貯蔵穴、各角よりに柱穴が４本、ほぼ全周する周溝が検出された。貯蔵穴は、長方形を呈し、一辺60×50cm、深度15cmである。柱穴は形態が円形、楕円形を呈し、規模はＰ１が径58×53cm、深度52cm、Ｐ２が径48cm、深度36cm、Ｐ３が64×52cm、深度42cm、Ｐ４が78×64cm、深度30cmであり、柱穴間はＰ１～Ｐ２が3.43m、Ｐ２～Ｐ３が3.05m、Ｐ３～Ｐ４が3.30m、Ｐ４～Ｐ１が2.80mである。周溝は西辺の北よりで１m、南辺の西端で0.55mほど見られない他は壁下より検出され、規模は幅12～17cm、深度４～６cmである。

床面は、多少の凹凸が見られるもののほぼ平坦で柱穴間内部には硬化面が見られる。

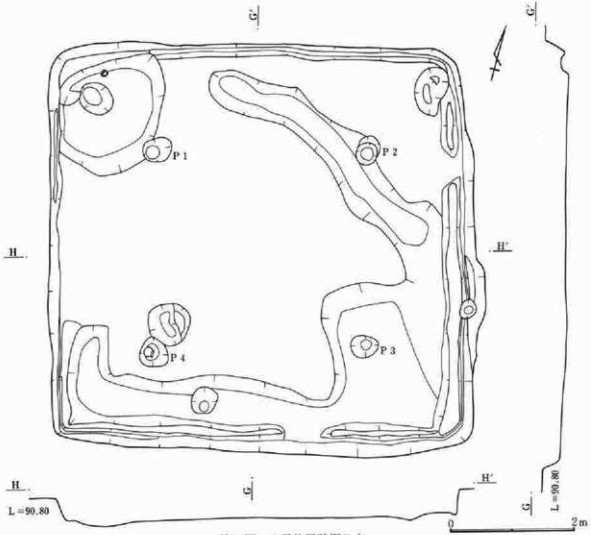
炉は、中央よりやや北側でＰ１とＰ２の間よりやや内側に位置し、規模は径80×75cmの円形の範囲に薄く焼土が残存する程度である。



第16図　3号住居跡使用面

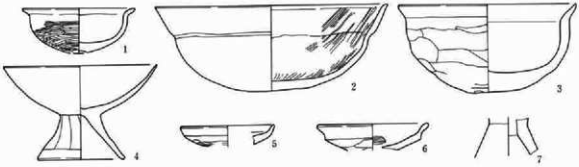


第17図　３号住居跡出土遺物分布図

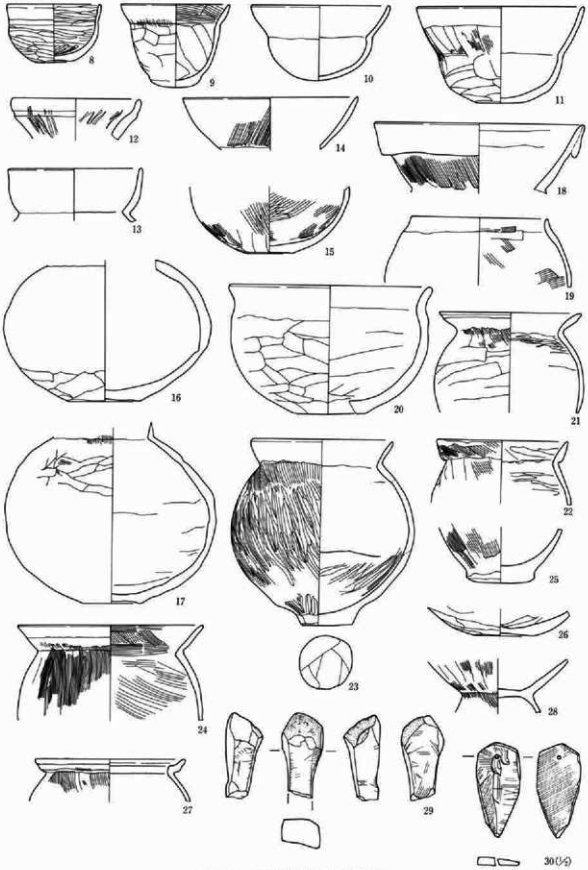


第18図　3号住居跡掘り方

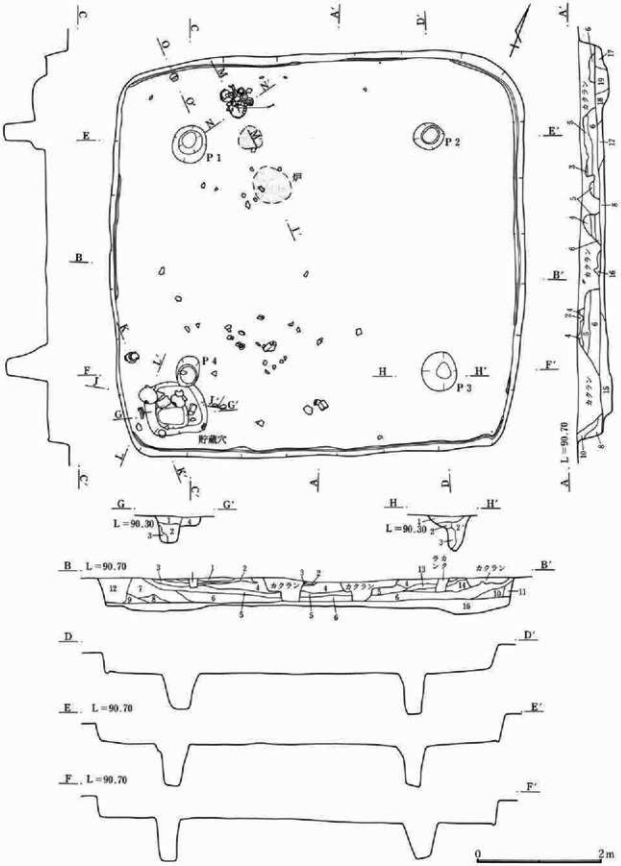
3号住居跡
1暗褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石及び軽石粒を若干含む、粘質土
2暗褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石及び軽石、粒子を含む
3黄色パミス
4黒色土　φ0.5～1cmの白色軽石及び軽石粒を含む
5暗褐色土　φ0.5～1cmの黄色軽石及び軽石粒と白色軽石粒、赤褐色砂を含む
6暗褐色土　5と同様であるが、赤褐色砂を多量に混入
7黒灰褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石、黄色軽石及び粒子を多量含む
8黒灰褐色土　7と同様であるが、軽石の粒子の大きさが小さく含有量が少ない
9黒灰褐色土　6ブロック及び壁面に明褐色粘土ブロックを含む
10灰黒色土　白色軽石を若干と床面に灰色粘土ブロック及び壁面に明褐色土粒を含む



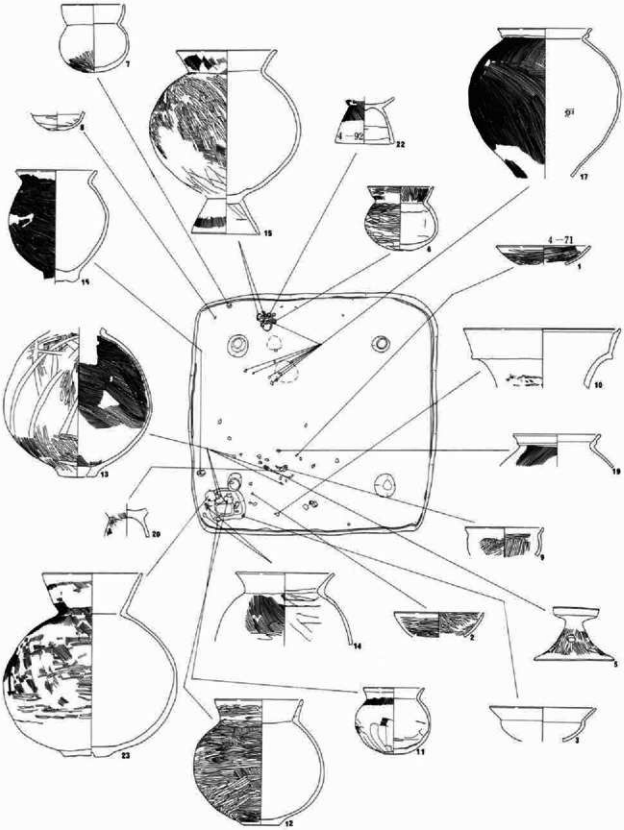
第19図　3号住居跡出土遺物(1)



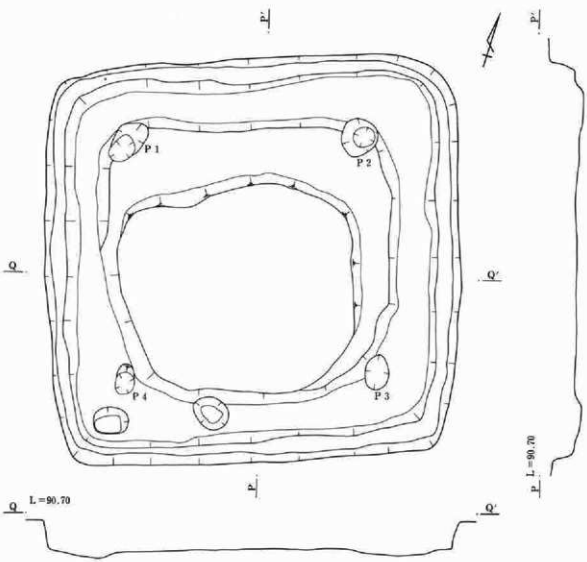
第20図　3号住居跡出土遺物(2)



第21図　4号住居跡使用面



第22図　４号住居跡出土遺物分布図



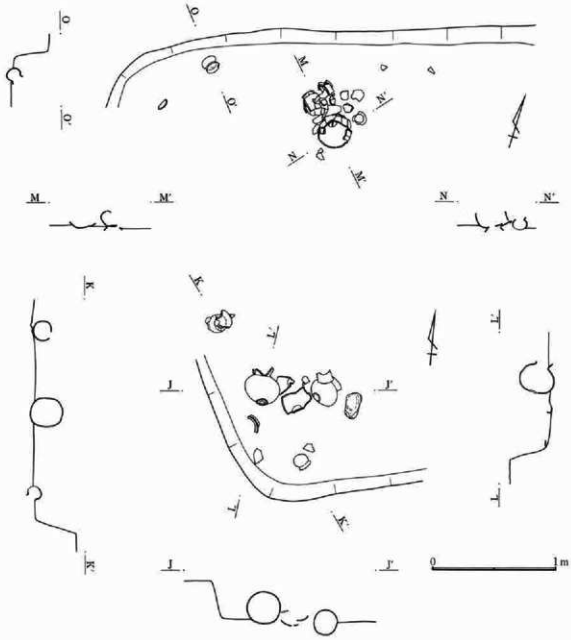
4号住居跡
1暗褐色土　白色軽石及び黄色軽石、白色・黄色軽石粒を含む。粘性あり
2黄色軽石
3黒褐色土　白色軽石粒及び黄色軽石粒を含む、若干粘性あり
4暗褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石及び黄色軽石、軽石粒を多量に含む
5暗褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石粒を含む
6暗褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石及び軽石粒を混入
7明褐色土　白色軽石を若干と黄色軽石を含む、砂質土
8暗灰褐色土　床面に灰褐色土粒を含む
9明褐色土　白色軽石を若干と床面に灰褐色土と壁面明褐色土を含む
10暗褐色土　6と同様、φ1～2cmの明褐色ブロックと白色軽石を含む
11暗褐色土　6と類似
12明褐色土　4と7、6をブロック状に含む
13明褐色土　白色・黄色軽石粒を多量に含む
14明褐色土　白色・黄色軽石粒を含む
15暗褐色土　乳白色土ブロックと明褐色土ブロック含む
16灰褐色土　15をブロック状に含む
17灰褐色土　16と同様であるが暗灰褐色味が強い
18暗灰褐色土　16と同様
19暗褐色土　灰褐色土ブロックと明褐色土ブロック、黒色土ブロックを含む

4号住居跡貯蔵穴
1暗褐色土　白色軽石粒と焼土を含む
2暗褐色土　1に類似、焼土は含まない
3暗褐色砂質土
4暗灰褐色砂質土

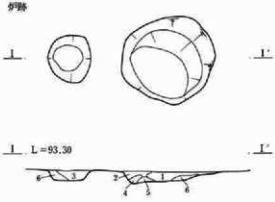
4号住居跡P3
1暗褐色土　含有物ほとんど見られない
2暗灰褐色土　黄褐色砂質土をブロック状に含む
3　〃　黄褐色砂質土を2より多く含む
4黒褐色土　灰黄褐色砂質土をブロック状に含む

0　2m

第23図　4号住居跡掘り方



炉跡



４号住居跡炉
１暗灰褐色土　φ0.5～１cmの焼土粒及び灰色粒を多量に含む
２暗褐色土　φ0.5cmの焼土粒と灰色粒を含む
３暗褐色土　２に類似、２より焼土粒が少ない
４褐色土　ロームブロックを含む
５暗褐色土　灰褐色粒を多量に含む
６褐色土　灰色土粒を多量に含む
７暗灰褐色土　灰色土粒と焼土粒を含む

第24図　４号住居跡遺物集中地点・炉跡

4号住居跡

本住居跡は、Ⅳ区中央よりやや西に位置し、調査時点では他の遺構との重複関係は確認されなかった。 形態は、ほぼ方形を呈す。主軸方向は北から西へ18°を指す。規模は南北6.44m、東西6.52mで床面積37.5㎡を測る。

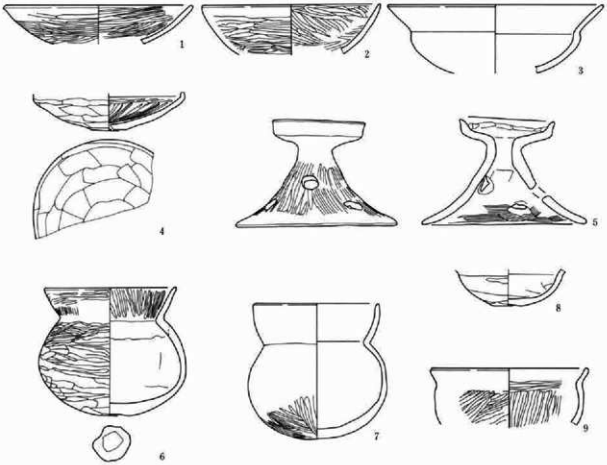
壁は、確認面から床面まで27～45cmでやや傾斜をもちながら立ち上がる。

内部施設は、南西隅に貯蔵穴、各角よりに柱穴が4本、全周はしないが壁下から周溝が検出された。貯蔵穴は、柱穴P4の掘り方と上面で重複するが、形態は方形で二段の掘り込みをもつ、規模は93×85cm、深度44cmである。柱穴は、4本とも径35～60cm、深度53～71cmであり、柱穴間はP1～2が3.87m、P2～3が3.76m、P3～4が3.97m、P4～1が3.88mである。周溝は一部見られない部分があるが規模は幅5cm前後、深度も5cmほどである。

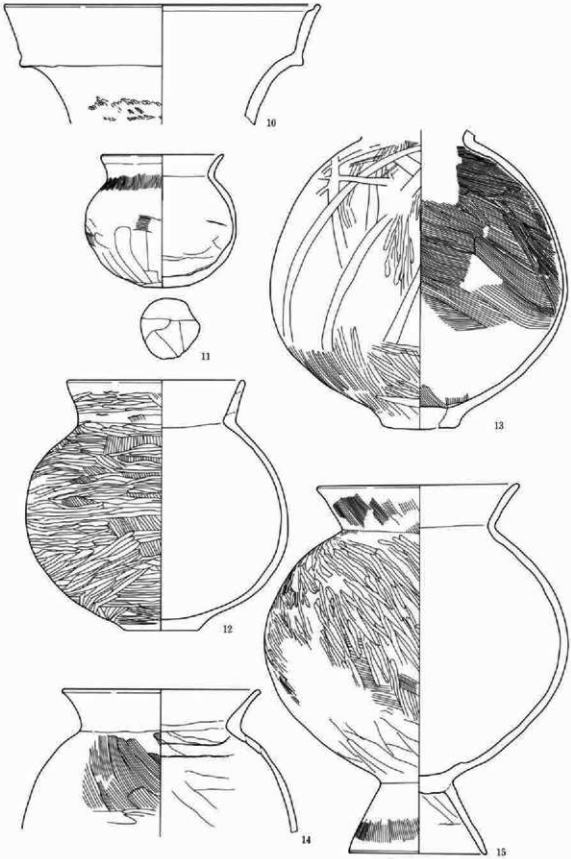
床面は、多少の凹凸が見られるもののほぼ平坦で柱穴間の内部では硬化面が見られる。

炉は、P1とP2の間よりやや内側でP1よりに位置し、径62×57cmの範囲に薄く焼土が残存する程度である。

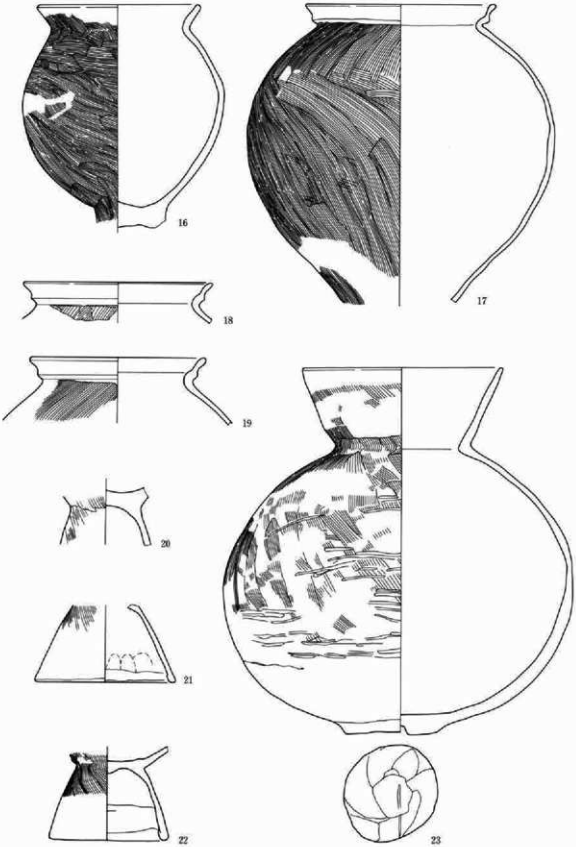
掘り方は、周辺部は溝状に幅80cmで床面から15～20cm程掘り込まれ、中央部は5～8cmの掘り込みが見られる。



第25図 4号住居跡出土遺物(1)



第26図　４号住居跡出土遺物（２）



第27図　4号住居跡出土遺物(3)

５号住居跡

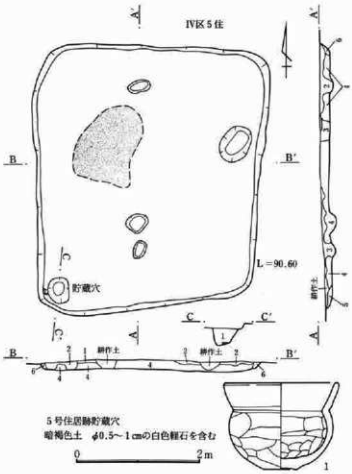
本住居跡は、Ⅳ区の中央付近に位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

形態は、東辺に比べてやや西辺が長いが長方形に近い。主軸方向は、ほぼ北方向を指す。規模は、長軸4.37m、短軸3.80mで床面積13.5m²を測る。壁は、確認面から床面まで15cm前後と低いため状態については明確ではない。

内部施設は、南西隅に貯蔵穴が検出されたほかは土坑状の浅い窪みが見られただけである。貯蔵穴は、楕円形を呈し、規模は径40×32cm、深度25cmである。

出土遺物は、土師器坩が１点貯蔵穴の西端より出土しただけである。

５号住居跡
１褐色土　焼土
２黒色土　φ0.5～１cmの白色軽石粒を含む
３暗褐色土　φ0.5cmの白色軽石、白色軽石粒を若干含む
４明褐色土　３に類似、砂質土
５暗褐色土　φ２～３cmの明褐色土ブロックを含む
６暗褐色土　３と同様、φ５cmの明褐色土ブロックを含む



第28図　５号住居跡使用面・出土遺物

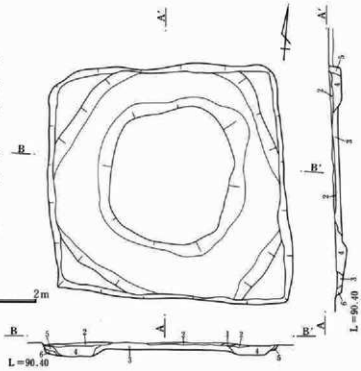
６号住居跡

本住居跡は、Ⅳ区の中央よりやや南よりに位置し、Ⅳ区１号畠と重複するが本住居跡の方が前出である。畠の耕作は床面まで及んでいるため掘り方だけの残存状態である。

形態は、ほぼ方形を呈し、主軸方向はほぼ北方向を指す。規模は南北3.70m、東西3.80mを測る。

掘り方は、周辺部が溝状に中央部より深く掘り込まれている。

６号住居跡
１褐色土　焼土
２暗褐色土　φ0.5～１cmの白色軽石、黄色軽石を含む
３明褐色土　２と４をブロック状に含む、砂質土
４黒色土　φ0.5～１cmの白色軽石とφ３～５cmの明褐色土ブロックを含む、粘性あり
５明褐色土　地山崩落土



第29図　６号住居跡使用面

2．掘立柱建物跡

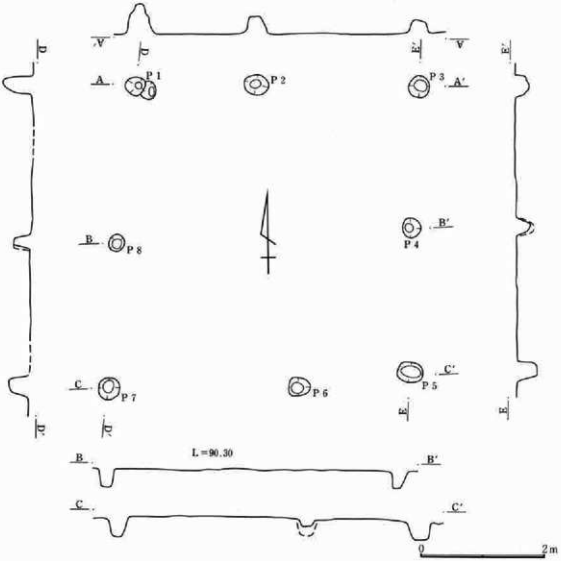
1号掘立柱建物跡

本跡は、Ⅳ区東南部分に位置し、Ⅳ区1号畠と重複するが、本跡の方が前出である。

形態は、南辺が北辺に比べてやや長いがほぼ長方形を呈す。規模は梁行、桁行とも2間である。東西方向4.80m、南北方向4.65mで柱穴内部の面積は22.0m²である。

各柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模はP1が径32×30cm、深度45cm、P2が径42×33cm、深度27cm、P3が径35×32cm、深度20cm、P4が径32×30cm、深度28cm、P5が径40×30cm、深度30cm、P6が径35×30cm、深度27cm、P7が径36×35cm、深度32cm、P8が径28×25cm、深度30cmである。

柱穴間は、P1～2が1.90m、P2～3が2.75m、P3～4が2.25m、P4～5が2.35m、P5～6が1.80m、P6～7が3.12m、P7～8が2.32m、P8～1が2.45mである。また、P6とP7の柱穴間は、他の柱穴間より広い間隔である。



第30図　1号掘立柱建物跡平面・エレベーション

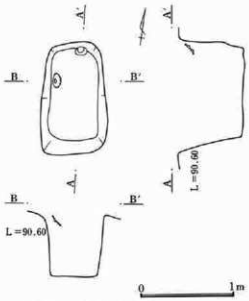
3．土　坑　墓

1号土坑墓

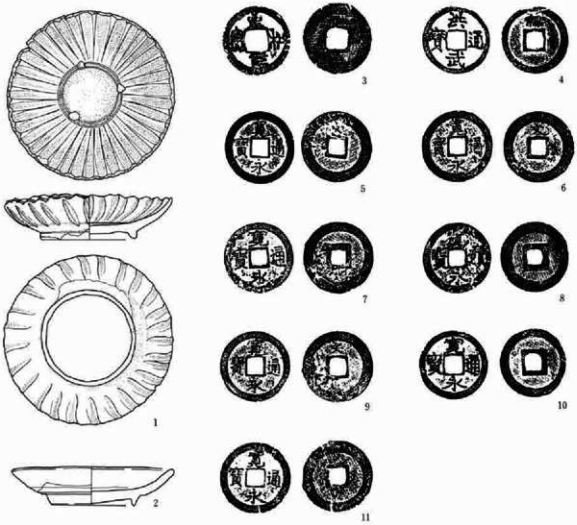
Ⅳ区東端部中程に単独で位置する。形態はやや南辺が北辺より15cmほど長いがほぼ長方形を呈す。規模は長軸1.17m、短軸0.72mで深度0.70mを測る。

土坑墓内部からは、埋葬された人の若干の人骨(P58の出土人骨を参照)のほか、副葬品として陶器の菊皿、灰釉皿、銭、小玉が出土している。

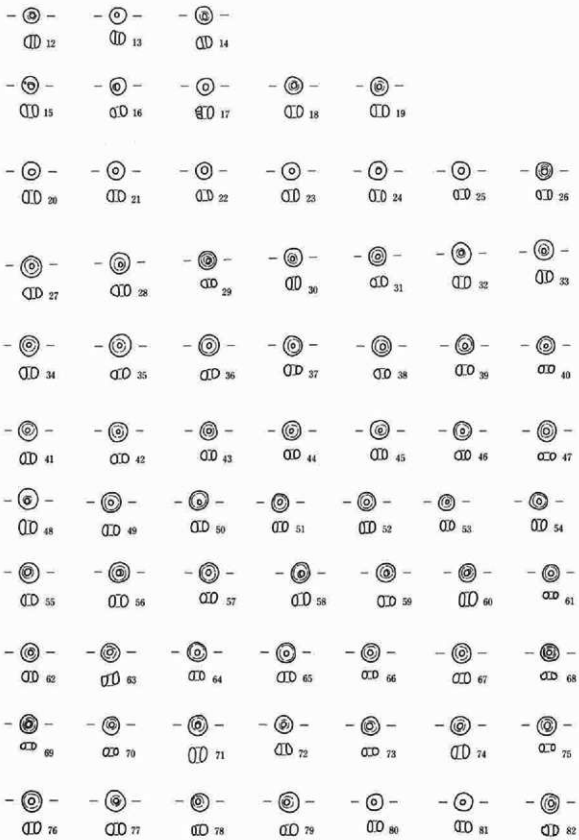
本土坑墓の時期は出土している陶器より17世紀代に比定される。



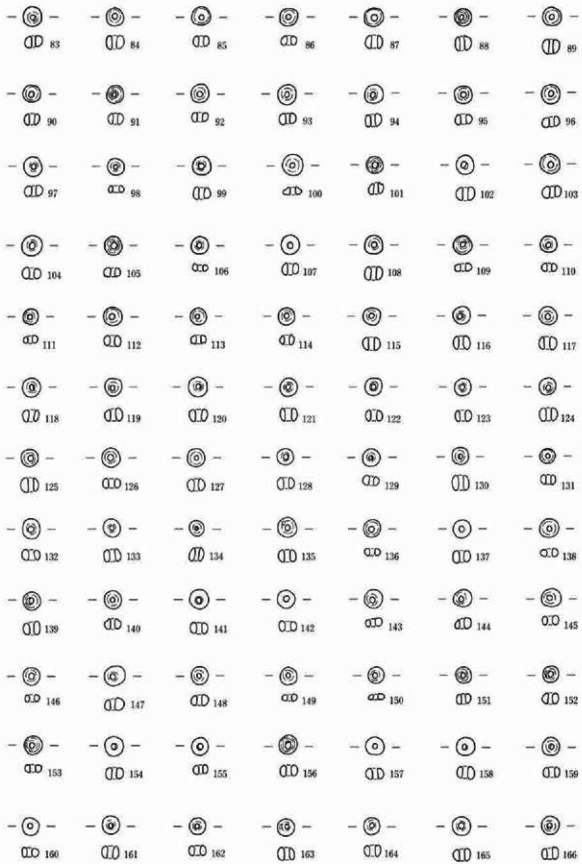
第31図　1号土坑墓平面・エレベーション



第32図　1号土坑墓出土遺物(1)



第33図　1号土坑墓出土遺物(2)



第34図　１号土坑墓出土遺物（３）

4．土　坑

発掘調査時に検出された土坑は、Ⅰ区4基、Ⅱ区5基、Ⅲ区17基、Ⅳ区6基、Ⅴ区9基の総計41基である。また、土坑の分布は、散漫的で規則性などの特徴は窺えない。

土坑の平面形態は、下記の表のとおりであるが、円形や楕円形が37基と大半を占め、Ⅲ区16号土坑の四角形、Ⅴ区4号土坑の長方形、Ⅲ区17号土坑の双円形、Ⅲ区11号土坑の不整形が各1基ずつ存在するだけである。断面形態は、底部に多少の凹凸をもつものも存在するが、大部分が逆台形を呈している。そうした中でもⅠ区1号土坑では、中程で段をもち中央部がさらに掘り込まれている。

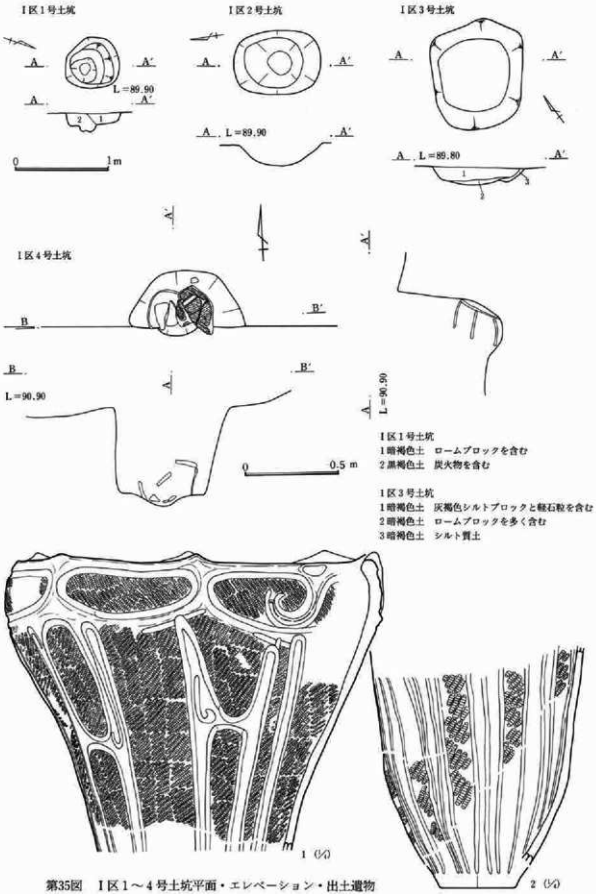
規模は、長軸の最大が222cm、最小が30cm、平均が74cmで短軸は最大が116cm、最小が27cm、平均が60cmである。深度は、確認面の位置地にもよるが最深が52cm、最浅が6cm、平均が17cmを測る。

埋土は、多くが浅間B（As－B）軽石を含む暗褐色土で埋没しているが、Ⅴ区7号、8号、9号土坑のようにFPとおもわれる白色軽石を含むものも存在する。また、土坑の埋没過程については、あまり明確ではないがロームブロックや粘土ブロックを含む埋没土が見られることから人為的な埋没であるものが多いと推定される。

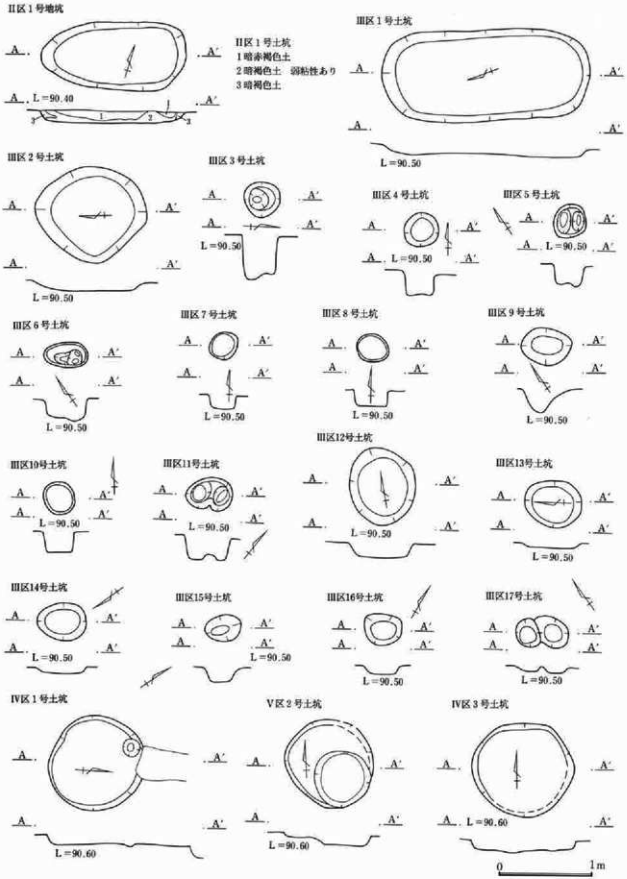
遺物が出土した土坑は、試掘調査の際に検出されたⅠ区4号土坑だけで他の土坑からは全く土器などの遺物の出土は見られなかった。

第1表　土　坑　表　　（単位　cm）

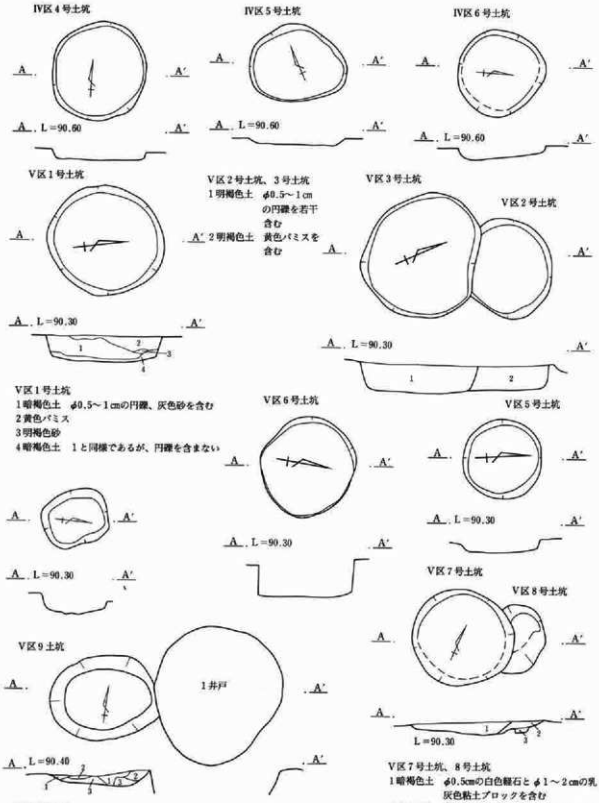
土坑No.	形　態	重複関係	長軸	短軸	深度	土坑No.	形　態	重複関係	長軸	短軸	深度
Ⅰ区1号	円　形	単　独	58	54	20	Ⅲ区15号	楕円形	単　独	38	28	16
Ⅰ区2号	楕円形	単　独	94	68	22	Ⅲ区16号	四角形	単　独	40	34	10
Ⅰ区3号	楕円形	単　独	118	98	22	Ⅲ区17号	双円形	単　独	76	34	6
Ⅰ区4号	円　形	単　独	62	—	52	Ⅳ区1号	楕円形	溝　→	102	100	12
Ⅱ区1号	楕円形	単　独	156	74	14	Ⅳ区2号	円　形	単　独	116	96	12
Ⅲ区1号	楕円形	単　独	222	98	10	Ⅳ区3号	円　形	単　独	108	100	14
Ⅲ区2号	楕円形	単　独	120	102	12	Ⅳ区4号	円　形	単　独	106	100	12
Ⅲ区3号	円　形	単　独	38	38	48	Ⅳ区5号	楕円形	単　独	104	82	8
Ⅲ区4号	円　形	単　独	38	36	28	Ⅳ区6号	楕円形	単　独	94	94	13
Ⅲ区5号	円　形	単　独	36	34	24	Ⅴ区1号	楕円形	単　独	124	116	28
Ⅲ区6号	楕円形	単　独	46	27	26	Ⅴ区2号	楕円形	3土坑→	106	88	24
Ⅲ区7号	円　形	単　独	30	28	16	Ⅴ区3号	楕円形	←2土坑	134	122	30
Ⅲ区8号	円　形	単　独	34	30	18	Ⅴ区4号	長方形	単　独	70	62	21
Ⅲ区9号	楕円形	単　独	54	40	32	Ⅴ区5号	円　形	単　独	48	48	14
Ⅲ区10号	円　形	単　独	34	32	22	Ⅴ区6号	円　形	単　独	108	103	42
Ⅲ区11号	不整形	単　独	50	36	26	Ⅴ区7号	円　形	←8土坑	110	102	14
Ⅲ区12号	楕円形	単　独	82	71	14	Ⅴ区8号	楕円形	7土坑→	72	44	14
Ⅲ区13号	楕円形	単　独	60	50	6	Ⅴ区9号	楕円形	←1井戸	112	90	14
Ⅲ区14号	楕円形	単　独	52	40	8						



第35図　Ⅰ区１～４号土坑平面・エレベーション・出土遺物



第36図　II区1号・III区1～17号・IV区1～3号土坑



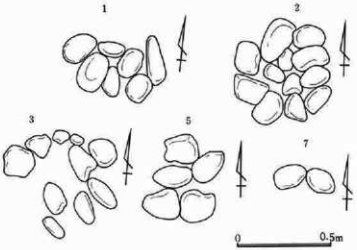
第37図　Ⅳ区４～６号・Ⅴ区１～９号土坑

5．集　　石

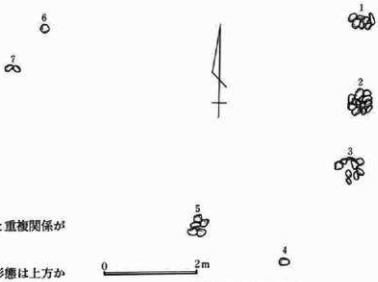
集石群は、Ⅳ区中央よりやや北側に位置する。集石は、東西8m、南北5mほどの楕円形状に配置されているが、東側の1号～3号集石が礫の数も多く集石自体も接近している。集石には、φ10～20cmの円礫が径50～60cmほどの範囲に集められており、その残存している数も1個から12個と差が見られれる。

集石群の内部およびその周辺からは、集石に伴うようなピット・焼土などは検出されなかった。

また、礫のほかには、遺物などの出土はみられなかった。



第38図　1・2・3・5・7号集石



第39図　集石全体図

6．井　　戸

1号井戸

Ⅴ区のほぼ中央に位置し、9号土坑と重複関係がみられるが本井戸のほうが新しい。

平面形態は、ほぼ円形を呈し、断面形態は上方から下方へ若干縮まる筒状を呈し、中程の途中に湧水による崩落箇所が見られる。規模は、径1.50～1.40m、深度は1.65mを測る。

埋没状態は、全体的に土砂がブロック状に埋没しており短時間に埋め戻されている。

井戸跡内部からの出土遺物は、土師器や須恵器の土器の小片が僅かと礫が出土した程度である。

3号井戸

Ⅴ区の北側に位置し、単独で存在する。

平面形態は、楕円形を呈し、断面形態は上半が円錐状、下半が筒状を呈すが、下半はやや斜め下方に掘り込まれている。

規模は、確認面で径1.70×1.50m、底部が径0.70m、深度は1.90mを測る。

埋没状態は、周囲から土砂が短期間にいれられた状況が観察される。

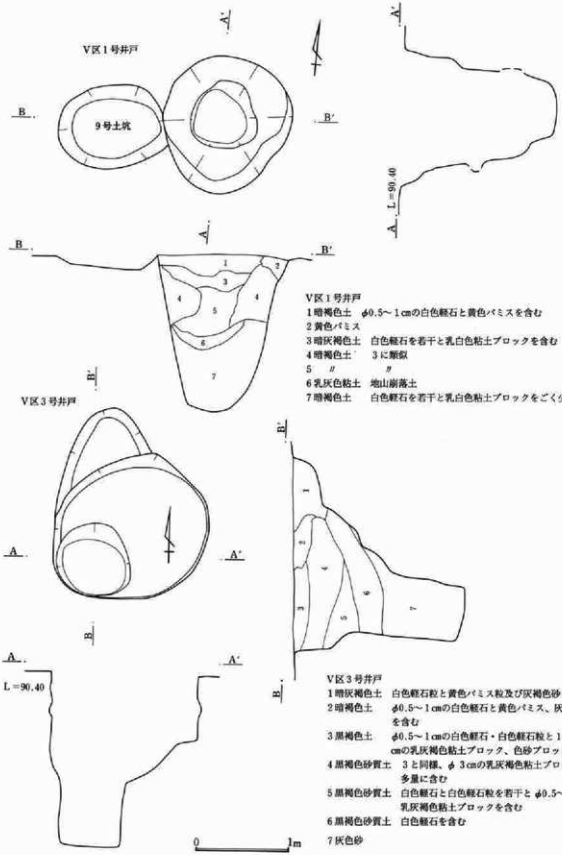
2号井戸

Ⅴ区の北側、3号井戸の南に位置し、他遺構との重複関係は、見られない。

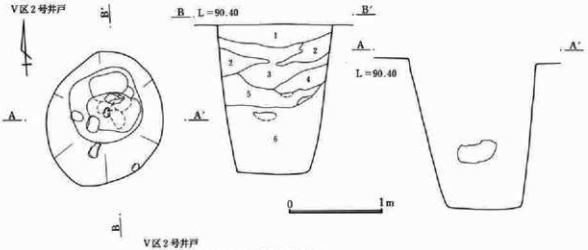
平面形態は、確認面で楕円形を底面で方形を呈し、断面形態は上方から下方へ縮まる筒状を呈す。

規模は、確認面で径1.45×1.20m、底面で一辺0.70m、深度1.60mを測る。

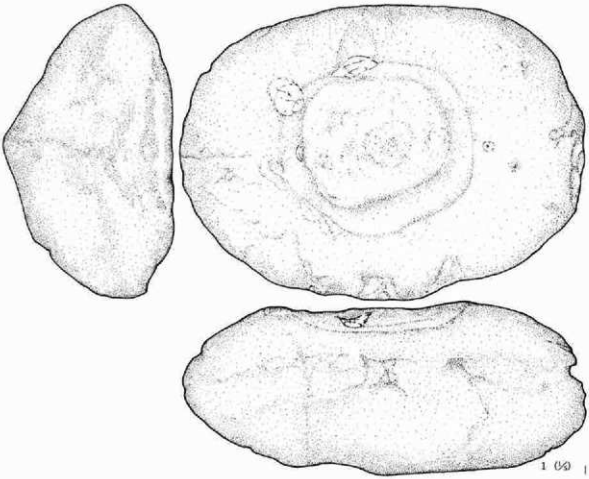
埋没状態は、周囲より土砂を投げ込まれるように埋没しており短期間に人為的に行われたようである。　本井戸跡の下位から径63×40×22cmほどの礎石に使用された礫が出土している。



第40図　V区１・３号井戸平面・セクション・エレベーション



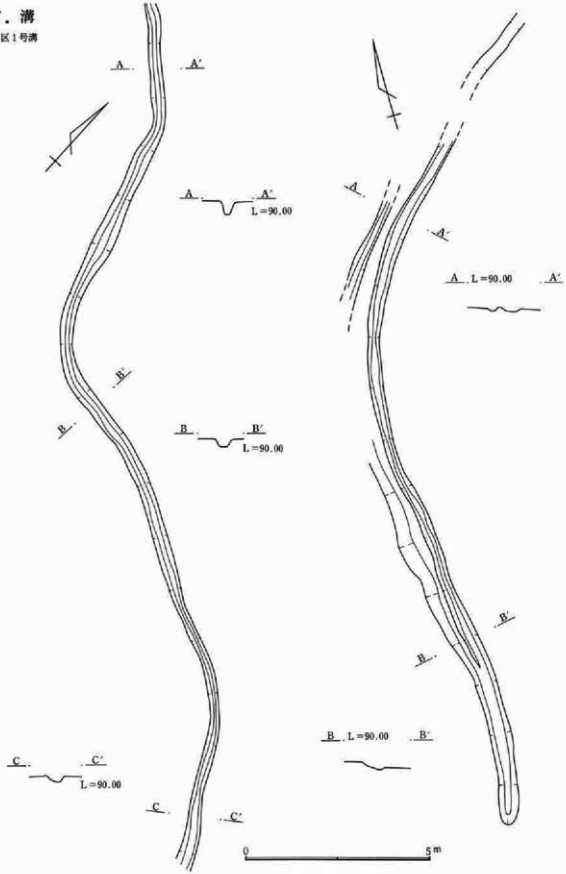
V区2号井戸
1暗褐色土　φ0.5～1cmの白色軽石を含む
2暗褐色土　白色軽石を若干と乳灰色粘土ブロックを多量に含む
3暗褐色土　2と同様、φ1～3cmの乳灰色粘土ブロックを含む
4暗褐色土　乳灰色粘土ブロックを多量に混入
5灰色砂



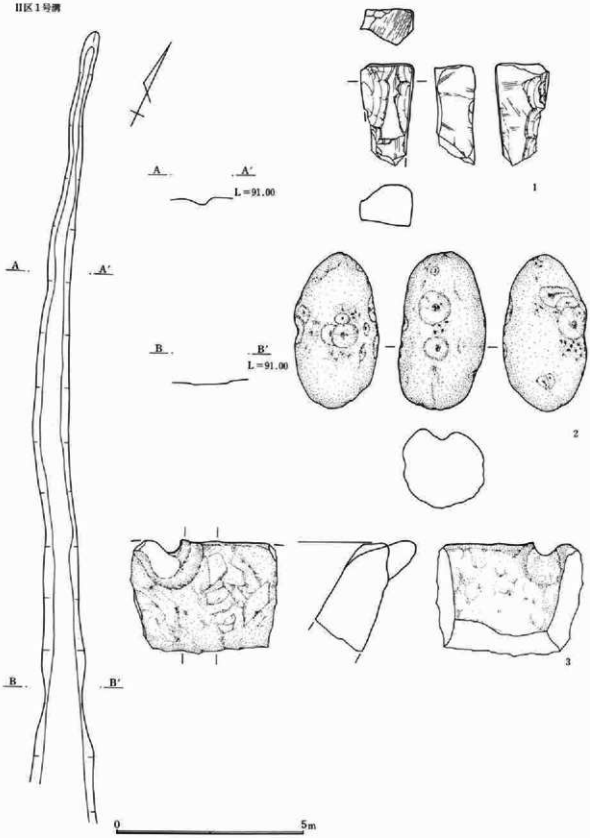
第41図　V区2号井戸平面・セクション・エレベーション・出土遺物

７．溝

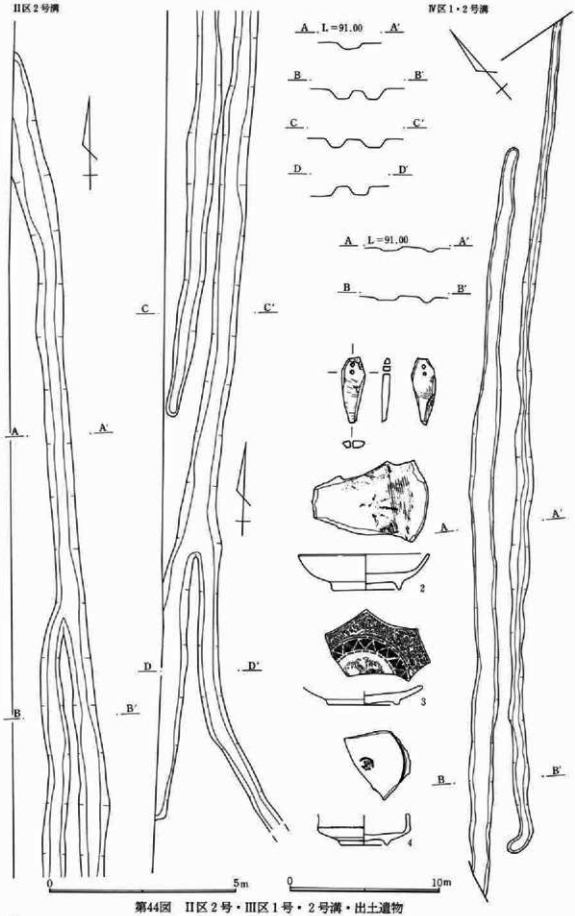
Ⅰ区１号溝



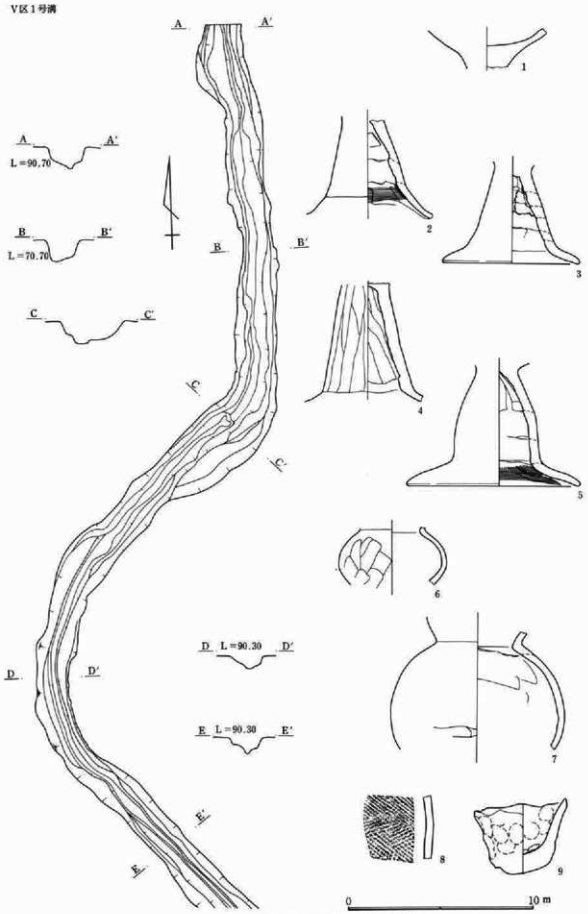
第42図　Ⅰ区１号・２号・３号溝



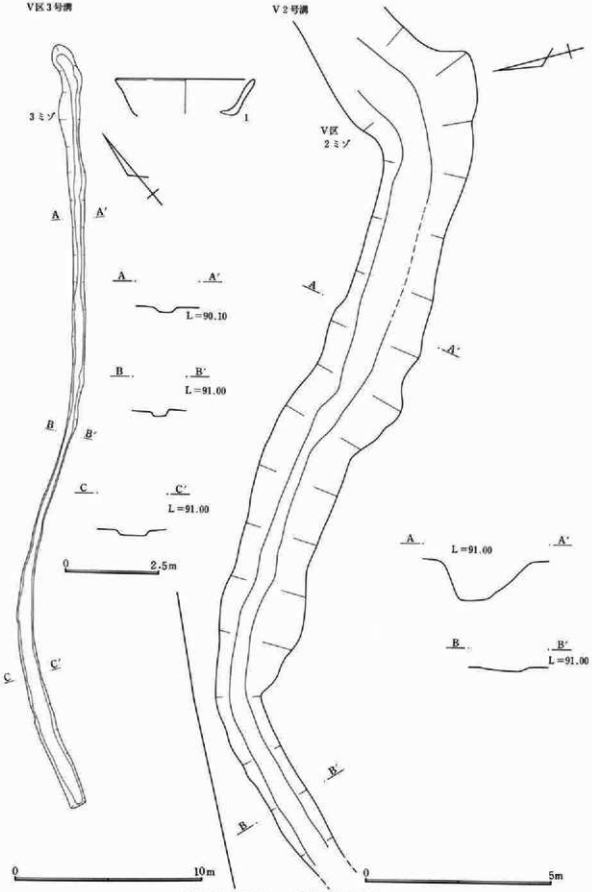
第43図　II区1号・II区2号溝出土遺物



第44図　II区２号・III区１号・２号溝・出土遺物



第45図　V区1号溝出土遺物



第46図　V区2・3号溝・出土遺物

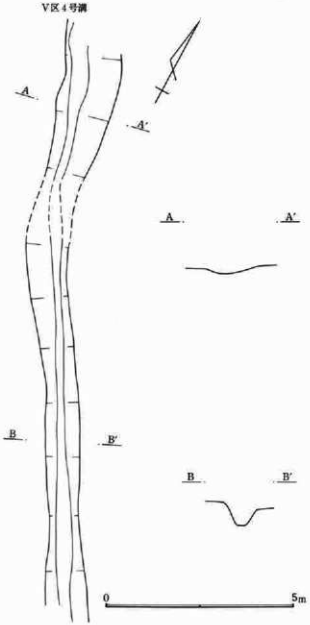
溝は、Ⅰ区で3条、Ⅱ区、Ⅲ区で各2条、Ⅴ区で4条の計11条が検出されている。

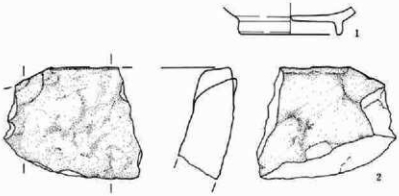
Ⅰ区の溝は、1号溝が北西部で2号・3号溝は南東部に位置し、それぞれ単独で存在するが、2号溝は検出された長さが3mと短いが3号溝と平行するような位置関係にある。また、1号溝、3号溝とも調査区内を蛇行するように存在する。

Ⅱ区の溝は、1号溝が東側を2号溝が西側を横断するように位置し、それぞれ単独で存在する。1号溝は、直線的で調査区の北東部に片方の端部が見られ、南側になるほど幅が広がる。1号溝では、砥石、多孔石、石鉢片が出土している。

Ⅲ区の溝は、中央付近で2条が平行して位置しており、それぞれ単独で存在する。1号溝、2号溝は、ともに直線的で、1号溝は調査区の北側、2号溝は調査区の南側に端部が見られる。出土遺物は、1号溝で剣形石製模造品、陶器が出土している。

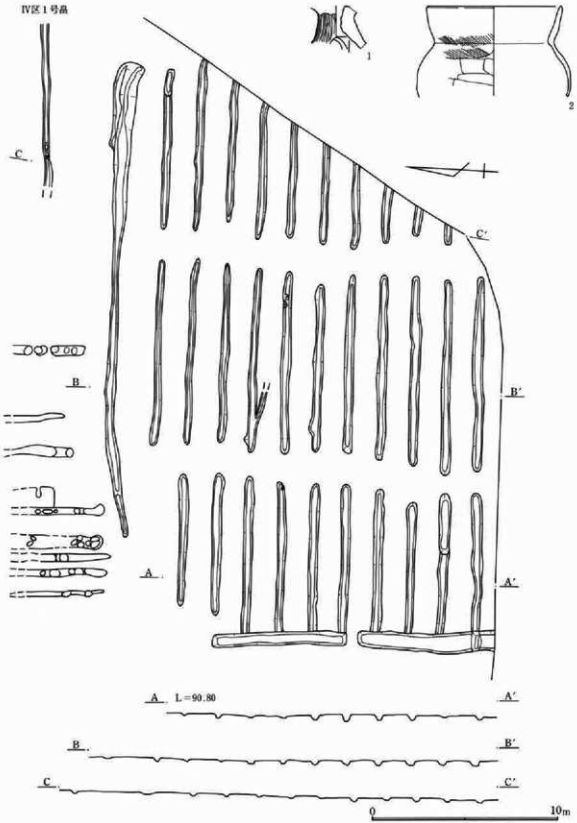
Ⅴ区の溝は、1号、3号溝が中央付近、2号溝が北側、4号溝が東側に位置し、2号溝、3号溝は単独で存在するが、4号溝は2号畠と重複関係にあり、4号溝のほうが新しい。また、1号溝は、2号畠と一部で重複するが全体的には迂回するように蛇行しているため新旧関係は明確ではない。1号溝では、古墳時代の土師器高杯、甕、坩、手づくね形土器、須恵器甕などが出土している。





第47図　Ⅴ区4号溝・出土遺物

8．畠　　跡



第48図　IV区1号畠跡・出土遺物

Ⅳ区1号畠

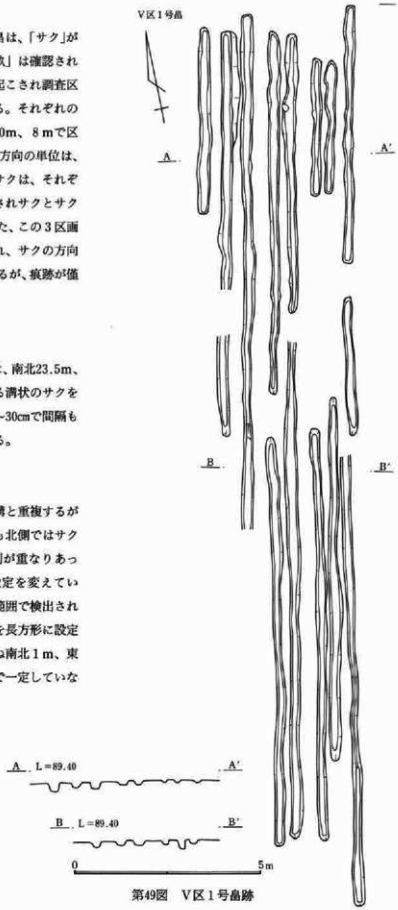
Ⅳ区調査区の東南角に位置する。畠は、「サク」が溝状に平行して検出されただけで「畝」は確認されなかった。畠は、東西方向にサクが起こされ調査区内では3区画に小さく区分されている。それぞれの単位は、東からサクの全長が10m、10m、8mで区画の間を1.5mほど空けている。東西方向の単位は、調査区外に延びるため不明である。サクは、それぞれの単位をとおしても直線的に起こされサクとサクの間隔はほとんどが1.3mである。また、この3区画の北側は全長25mほどの溝で区画され、サクの方向を90°かえた畠の痕跡が確認されているが、痕跡が僅かで詳細は不明である。

Ⅴ区1号畠

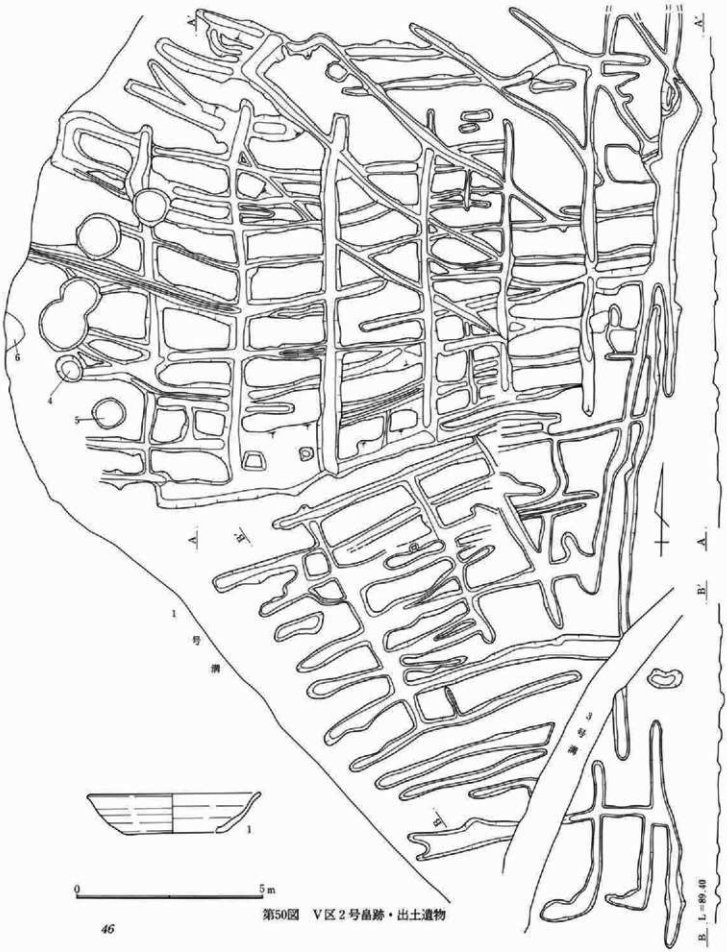
Ⅴ区調査区の西側に位置する。畠は、南北23.5m、東西4mの範囲で東西方向に走行する溝状のサクを検出しただけである。サク幅は、20～30cmで間隔も一定ではなく30～50cmと不規則である。

Ⅴ区2号畠

Ⅴ区調査区の南側に位置し、3号溝と重複するが本跡のほうが前出である。また、畠も北側ではサクの走行をやく45°ほど異にするサク列が重なりあっていることからある時期で区画の設定を変えている。サクは、南北24m、東西18mの範囲で検出されており、その走行は南北、東西で畝を長方形に設定しており、その規模は北半分では概ね南北1m、東西2mであるが、南半分では不規則で一定していない。



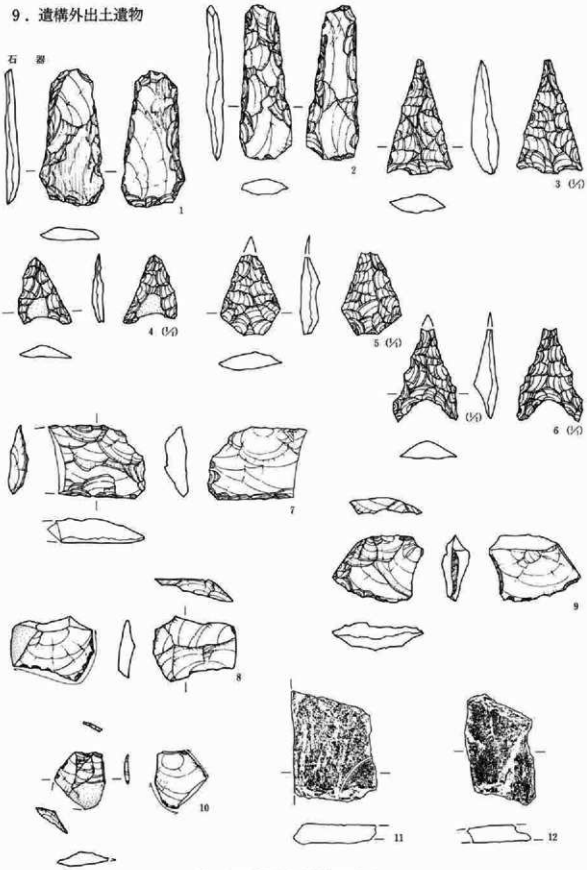
第49図 Ⅴ区1号畠跡



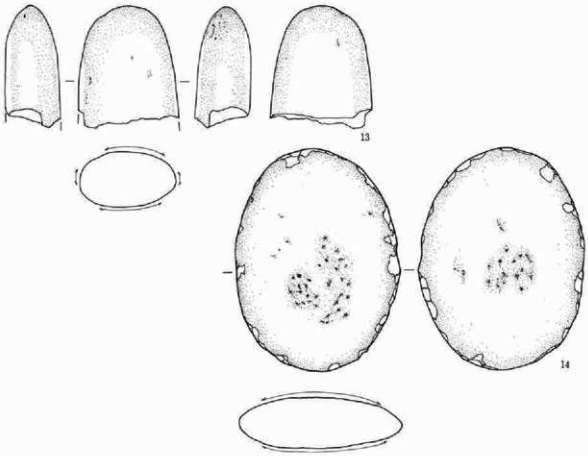
第50図　Ⅴ区２号畠跡・出土遺物

9．遺構外出土遺物

石　器

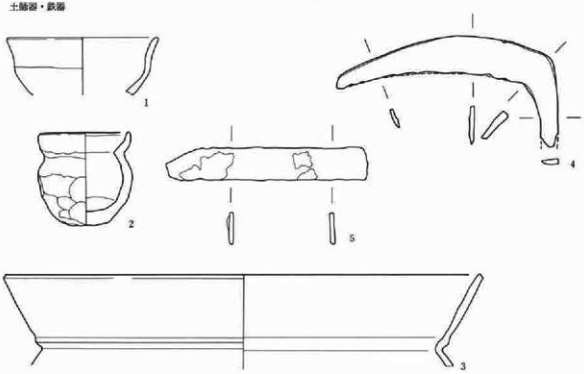


第51図　遺構外出土遺物石器（1）



第52図　遺構外出土遺物石器（２）

土師器・鉄器



第53図　遺構外出土遺物土師器・鉄器

第３章　波志江中峰岸遺跡

１．溝

波志江中峰岸遺跡では、Ⅰ区で19条、Ⅱ区で４条、Ⅲ区で13条と多くの溝が検出されているが、すべて幅１ｍ以内で深さも深くて30cm程度のものである。

溝からの出土遺物もほとんどなく、一部の溝で土師器や須恵器、陶器等の小片が出土しているだけであるが、これらの溝に共伴するか明確ではない。

溝の年代については一部でAs-B層上面で確認されているが、ほとんどは不明確である。

Ⅰ区では、19条のうち14条が調査区東北隅のローム台地から水田面にかけての傾斜地に位置し（全体図参照）、Ⅰ－２号溝を除いて数条にわたって重複している。これらの溝群は、ローム台地の傾斜に沿って掘り込まれているため、平面形態は緩い弧状を描いている。Ⅰ－２号溝は、ローム台地と水田面との境に位置し、Ⅰ－13号溝とAs-B層下水田跡１号アゼと重複しており、新旧関係はⅠ－13号溝より前出で水田アゼよりが後出である。幅60cm程で深度30cm程で断面形態は、逆台形状を呈している。

Ⅰ－13号溝は、ローム台地から水田面に向かって傾斜に直交するように位置している。平面形態は、幅が１～３ｍの間で広くなったり、狭くなったり一定ではないが、概ね標高の高いほうが狭く低いほうが広くなっており流路ではないかと想定される。

Ⅱ区の溝は、調査区をやや斜めに横断するように位置するものとそれに直交するように位置するものがほとんどであるが、調査区西側でやや蛇行した溝が検出されており流路の可能性が見られる。

Ⅱ－３号溝は、As-B層上面で検出されており、ほぼ傾斜に沿って掘り込まれている。幅は30～50cm、深度はAs-B層下水田跡耕作土面から15～25cmである。

Ⅲ区の溝は、調査区のほぼ中央付近を南北に横断するように一部重複しながらほぼ平行に位置する。

２．水　田　跡

水田跡は、Ⅰ区の北東部分に残るローム台地を除いた部分とⅡ区の東側、Ⅲ区の溝群の西側で検出されている。なお、Ⅰ区からⅡ区の東側は同一の谷地であり単に道路が中央に位置するため便宜的に調査区を区分しただけで同一の水田跡である。

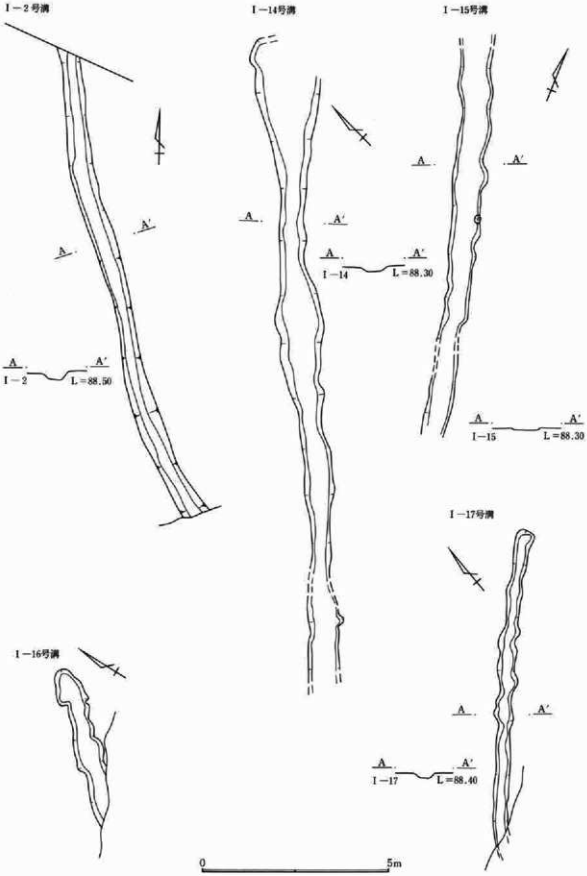
これらの水田跡は、すべてAs-Bに覆われたものである。As-Bは、第１章３、基本土層の項にあるように約10cmの堆積がみられるが、アゼ等の残存状態はあまり良好ではなく部分的に残存する程度でアゼの詳細や区画、水口等については全く不明である。

Ⅰ区からⅡ区にかけての水田跡は、幅約60mの谷地に営まれている。水田域の標高は、最高値が東側で88.3m、西側で88.7m、最低値が88.1mと比高差がほとんど見られないごく緩い谷地である。アゼは、第57図に示したようにほぼ平行と直交するように位置する。アゼの間隔は、最小が１号アゼと３号アゼの間で9.5m、最大が３号段と７号アゼの間で19.2mでそのほかのアゼの間も概ね15m前後と幅が広くこれらのアゼの間に小アゼが存在していないならば１区画は相当に広い面積をもっていたと推定される。

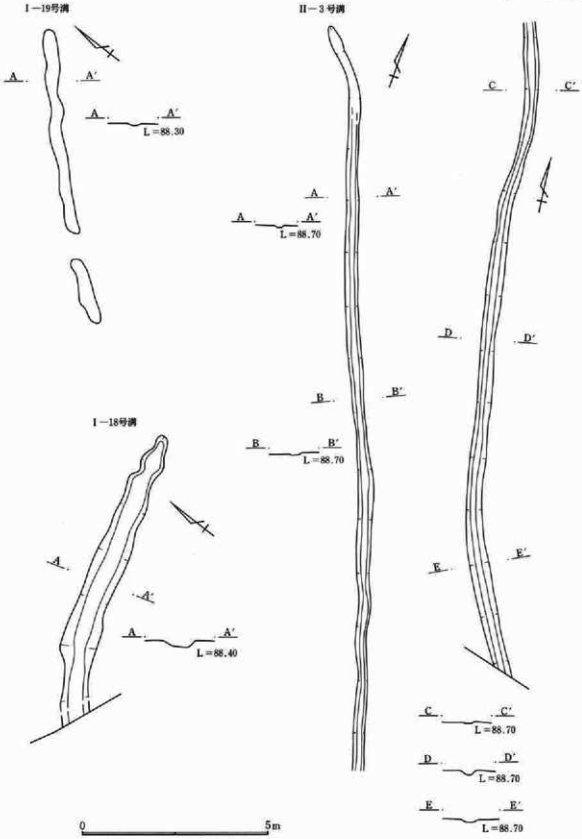
Ⅲ区の水田跡は、アゼが４本と段が１カ所確認されただけである。水田域の標高は、最高値が88.35m、最低値88.10mで比高差25cmほどのⅠ・Ⅱ区水田跡と同様にごく緩い傾斜地に営まれている。

アゼは最長でも９号アゼの10mが最高で他は４～５ｍと一部しか検出されていない。

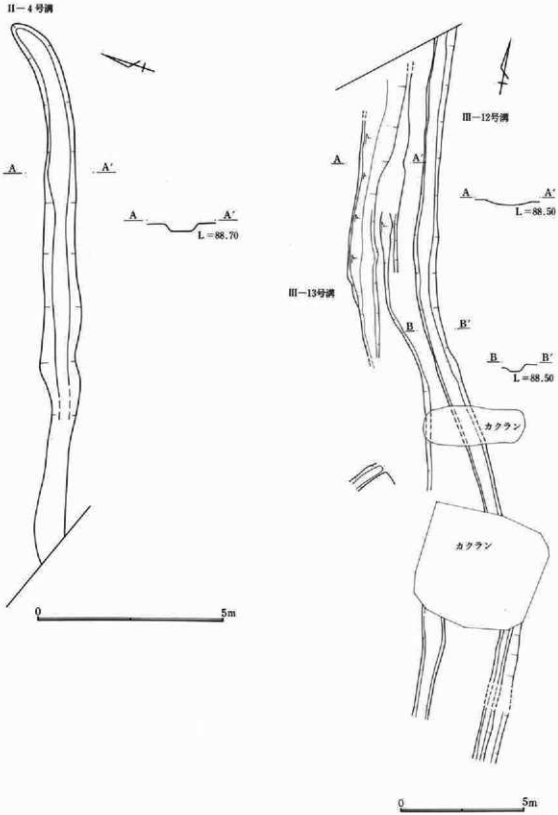
水田の区画については、９号アゼと４号段の間隔が４ｍ、４号段と10号アゼの間隔が５ｍであり、Ⅰ・Ⅱ区の水田に比べて狭い様相を呈している。



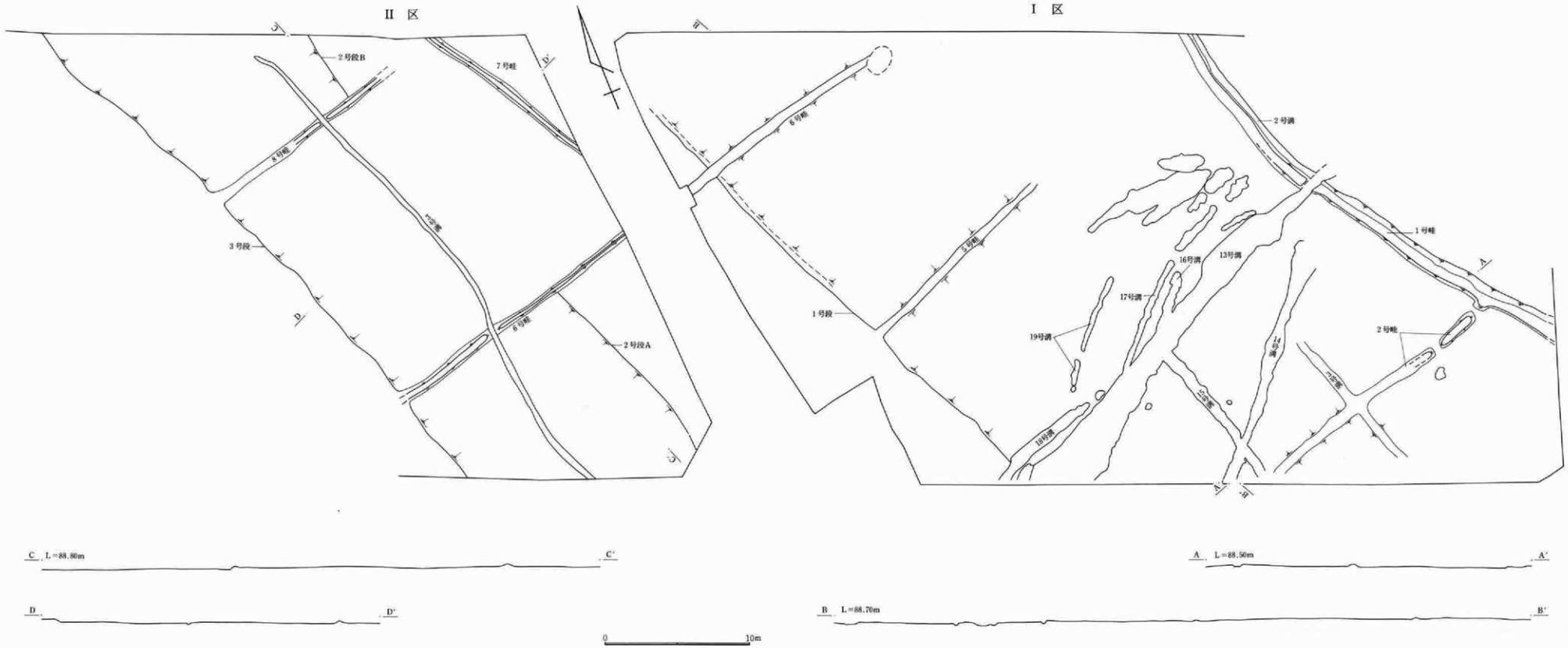
第54図　中峰岸Ⅰ区１号・14～17号溝



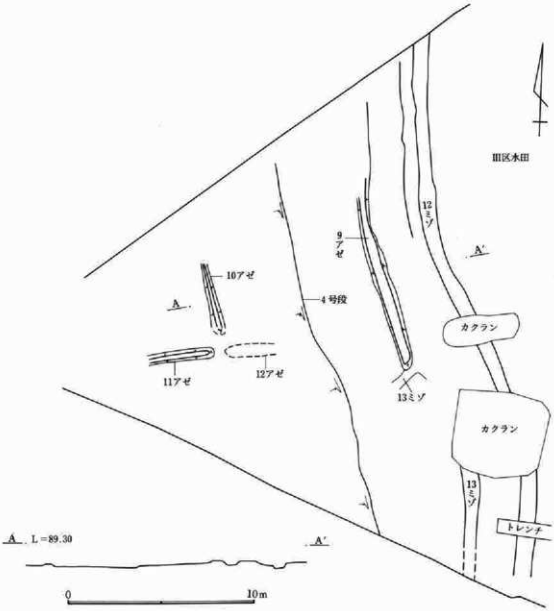
第55図　中峠岸Ⅰ区18・19号・Ⅱ区3号溝



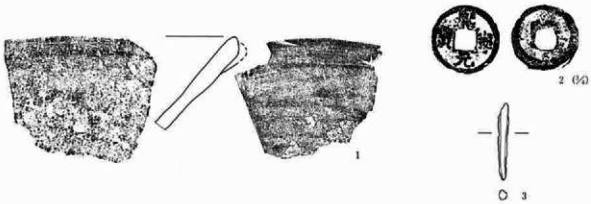
第56図　中峰岸II区4号・III区13・14号溝



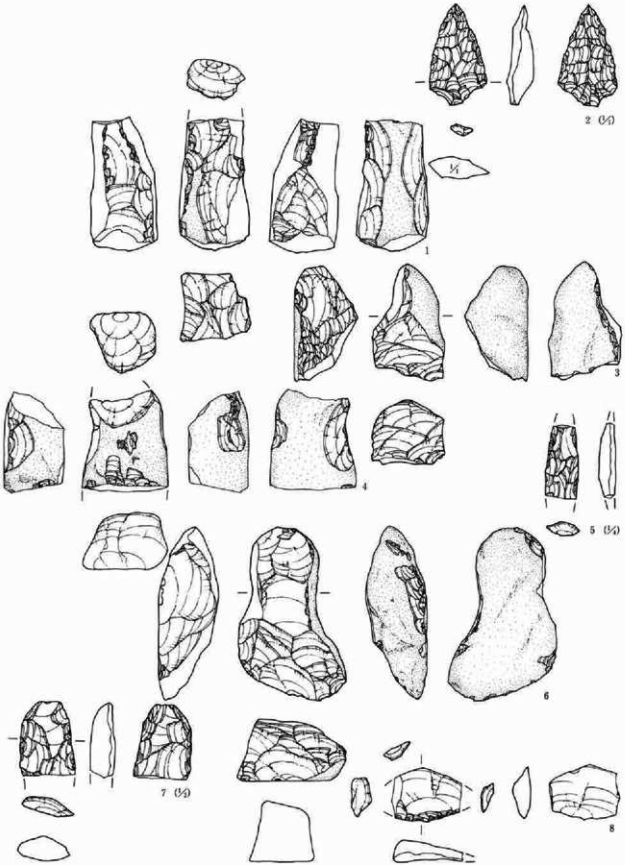
第57図　中峯岸Ⅰ区・Ⅱ区水田跡



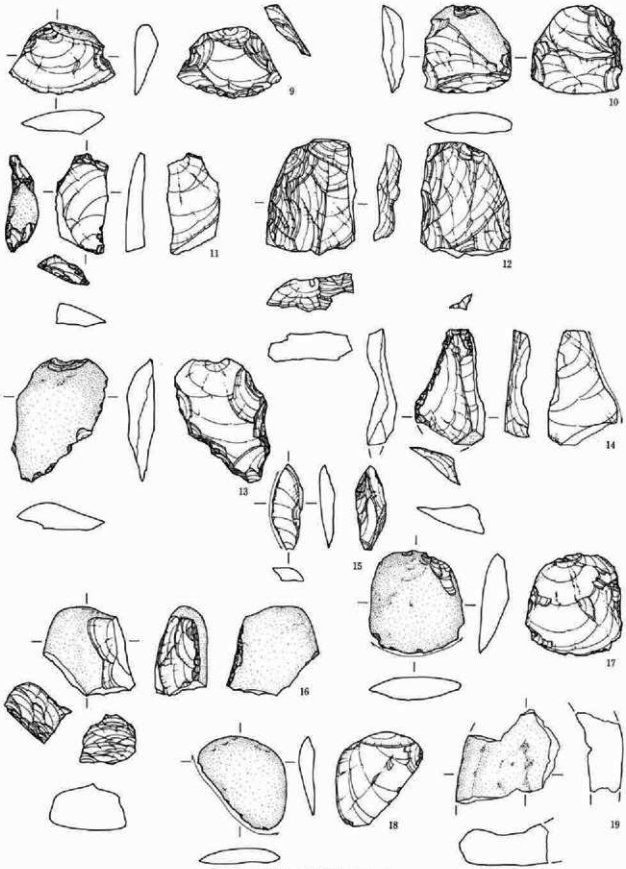
第58図　中峰岸Ⅲ区水田跡



第59図　中峰岸Ⅰ～Ⅲ区水田跡出土遺物



第60図　遺構外出土遺物石器(1)



第61図　遺構外出土遺物石器(2)

第4章　分析・鑑定

1．飯土井上組遺跡1号土坑墓出土の出土の人骨・歯

群馬県立大間々高等学校教諭　宮崎重雄

飯土井上組遺跡は群馬県前橋市飯土井町にあり、Ⅳ区1号土坑墓から1固体分の人歯が検出された。個々では、その個々の歯について記載する。解剖用語は上条(1978)を主に用いた。

①右上顎第二切歯は、切縁に咬耗による象牙質が露出し、近心と遠心の辺縁隆線にもエナメル質の咬耗があり、ごく軽い鋏状咬合をしていたことを窺わせる。

②左上顎犬歯は尖頭部に3.2×1.0mmの象牙質が露出し、hypoplasia と思われる明瞭な溝が4本発達している。棘突起・舌面歯頸隆線・舌面歯頸溝は認められず、中央舌面隆線・舌面溝は明瞭である。

③右下顎犬歯は尖頭部に3.7×1.1mmの象牙質が露出し、hypoplasia と思われる明瞭な溝が4本発達している。

④右上顎第二小臼歯は、頬側咬頭に1.0×1.0mmの咬耗による象牙質が露出するが、エナメル質の咬耗はほぼ全面に及んでいる。近心溝・近心介在結節が存在する。

⑤左上顎第二小臼歯は、咬耗のため、歯冠形態の詳細は不明である。

⑥右下顎第一小臼歯は頬側咬頭に2.0×2.0mmの小さな象牙質の露出がある。舌側咬頭は近心側に位置し、辺縁溝は存在しない。舌側溝が近心側に観察される。

⑦左上顎第一大臼歯も象牙質の露出はない。しかし、咬耗は全面に及んでいて、歯冠形態の詳細は不明である。

⑧右上顎第二大臼歯は象牙質の露出はないが、エナメル質の咬耗のため歯冠形態は不明である。遠心側面に隣接面はない。

この他に、右下顎第一または第二大臼歯・左第一または第二大臼歯・下顎切歯・上顎小臼歯片など多数の細かい歯片が検出されている。犬歯の計測値をはじめ歯の計測値は小さく、女性を思わせる。また耗度から壮年期後半の年齢が推定される。いずれの歯にも齲蝕はない。

文　献
藤田恒太郎(1949)歯の計測基準について。人類学雑誌、67(3)、47−59。
上条　雍彦(1978)「日本人永久歯の解剖学」。アナトーム社。

歯の計測値（単位：mm）

	近遠心径	頬舌径	歯冠高
右上顎中切歯	7.2	5.5+	9.1+
右上顎犬歯	7.1	8.1	8.5+
右下顎犬歯	6.6	5.2+	9.1+
右上顎第二小臼歯	7.3	9.7	6.2
左上顎第二小臼歯	7.2	9.1+	6.3
右下顎第一小臼歯	7.0	7.6	7.0
左上顎第一大臼歯	9.8	11.7	5.5
右上顎第二大臼歯	10.1	11.1	5.4

計測法は藤田（1949）を用いた。

2．飯土井上組遺跡の炭化材樹種同定と炭火種実同定

藤根久・吉川純子（パレオ・ラボ）

1．試料および方法

炭化材および炭化種実は、いずれもAs-B経石下水田耕土層から出土した試料である。以下に、これら炭化材および炭化種実の記載と同定結果を示す。

2．各植物遺体の記載と結果

a．炭 化 材

炭化材は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の３断面を作る。各断面試料は、直径１cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子（株）製JSMT－100型）で観察する。

ケンポナシ属　Hovenia　クロウメモドキ科　図版１a～１c.

年輪のはじめに大型の管孔が１列程度並び、晩材部では小型の管孔が塊状あるいは放射方向に複合して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は、単一である（放射断面）。放射組織は、異性１～４細胞幅、３～55細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クロウメモドキ科のケンポナシ属の材と同定される。ケンポナシ属の樹木には、ケンポナシ（H. dulcis）やケンポナシ（H. tomentella）があり、いずれ樹高25m、幹径１mに達する落葉広葉樹で、ケンポナシが全国の温帯に、ケンポナシが本州西部や四国などに分布する。

b．炭化種実

採取された４点の炭化種実の検討を行ったが、以下に示すように分類群の同定は出来なかった。すなわち、出土した種実類は乾燥したものであり、最外壁だけが残っている。４点のうち、３点は（図版に示した№１～３）楕円形で上下が収束していて、壁は薄く、表面は長方形の細胞が縦に規則的に並んでいる。一方、他の試料は（図版に示した№４）形態は円筒型で、ほかの３点と外形は異なるが、外壁の表面形態は同じである。この出土植物遺体の分類群や部位は不明であるが、同様の表面構造を持ち形態が少しずつ異なることや、片側の収束する場所にしわが出来ていることなどから、高等植物の根茎の様なものではないかと推定される。

遺 物 観 察 表

飯土井上組遺跡1号住居跡

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第9図 P L19	土師器 杯	1/6	① 12.0 ② 9.4 ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は簡単なナデ、底部はヘラ削り。	
2 第9図 P L19	土師器 杯	床上2.5cm ¼	① 12.6 ② 8.0 ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整、底部はヘラ削り。	
3 第9図 P L19	土師器 杯	¼	① 13.2 ② 9.4 ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は無調整、底部はヘラ削り。	
4 第9図	須恵器 杯蓋	口縁部小片	① 15.2 ② ③	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。	
5 第9図 P L19	須恵器 杯	床上2.5cm 口縁部下半 ～底部片	① ② 7.0 ③	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り。	
6 第9図	須恵器 椀	床上2cm 口縁部片	① 14.2 ② ③	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。	
7 第9図 P L19	須恵器 椀	床上4cm 口縁部下半 ～高台片	① ② 7.2 ③	①細砂粒(含白色粒) ②酸化焔ぎみ ③灰黄色	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。	
8 第9図 P L19	須恵器 椀	床面直上 底部片	① ② 8.0 ③	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り、周辺は高台貼付時のナデ。	
9 第9図 P L19	須恵器 椀	口縁部下半 底部片	① ② 9.4 ③	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り、高台は別離。	
10 第9図 P L19	灰釉陶器 椀	振り方 口縁部片	① 15.6 ② ③	①微砂粒(含黒色粒) ②還元焔 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。施釉範囲は内面のみ、釉調は透明感のある淡緑色。	
11 第9図 P L19	須恵器 長頸壺	振り方 胴部下位～ 底部片	① ② 4.4 ③	①微砂粒 ②還元焔 ③灰白色	ロクロ整形、回転左回り。底部回転糸切り。	
12 第9図 P L19	土師器 壺	振り方 口縁部～胴 部中位片	① 21.0 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい褐色	「コ」の字状口縁壺。口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上位が横ヘラ削り、中位が縦ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	石　材 質　質	製作技法等の特徴	備　考
第9図—13 P L19	石器 砥石	振り方 両端欠	長13.8×幅8.1×厚5.9	紙沢石 906.0g	各面に擦痕あり	

飯土井上組遺跡2号住居跡

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第14図 P L19	土師器 杯	床面直上 ¼	① 11.2 ② 8.4 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は簡単なナデ。底部はヘラ削り。	
2 第14図 P L19	土師器 杯	床面直上 ¼	① 12.4 ② 10.4 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半は簡単なナデ。底部はヘラ削り。	
3 第14図 P L19	土師器 杯	床面直上 ½	① 13.0 ② 11.1 ③ 3.3	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	口縁部上半は横ナデ、下半は簡単なナデ。底部はヘラ削り。	
4 第14図 P L19	土師器 杯	床上2.5cm ¼	① 13.6 ② 7.8 ③ 3.2	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい赤褐色	口縁部上半は横ナデ、下半はヘラ削り。底部はヘラ削り。	
5 第14図 P L19	須恵器 杯	¼	① 11.6 ② 6.8 ③ 3.4	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
6 第14図 P L19	須恵器 杯	床上6.5cm ¼	① 13.6 ② 8.0 ③ 3.4	①微砂粒 ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ切り。	
7 第14図 P L19	須恵器 杯	床上5cm ¼	① 13.6 ② 7.0 ③ 4.1	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	
8 第14図 P L19	須恵器 杯	¼	① ② 7.0 ③	①細砂粒(含白色粒) ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
9 第14図 P L19	須恵器 椀	床面直上 口縁部下半 ～底部	① ②8.6③9.0 ③	①粗砂粒(φ5mmの礫) ②酸化焔 ③にぶい橙色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切りか。高台は貼付。	
10 第14図 P L19	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部～胴 部上位片	① 12.8 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③橙色	「コ」の字状口縁甕。類部に輪積痕が残る。口縁部から類部は横ナデ。胴部上位は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
11 第15図 P L19	土師器 甕	床上5cm 口縁部～胴 部上位片	① 18.9 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。類部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、類部は無調整部分が残る。胴部上位は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
12 第15図	土師器 甕	床上5cm 口縁部～胴 部上位片	① 18.1 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口縁部は横ナデ、類部は無調整部分が残る。胴部上位は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
13 第15図 P L19	土師器 甕	床上6cm 口縁部～胴 部上位片	① 19.4 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部から類部は横ナデ、胴部上位は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
14 第15図 P L20	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部～胴 部上位片	① 20.5 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部から類部は横ナデ、胴部上位は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
15 第15図 P L19	土師器 甕	床上5cm 口縁部～胴 部上位片	① 25.9 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	「コ」の字状口縁甕。口唇部に凹線が1条巡る。口縁部から類部は横ナデ、胴部上位は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
16 第15図 P L19	土師器 甕	胴部下位～ 底部	① ② 4.0 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③灰白色	胴部下位は横ヘラ削り。底部はヘラ削り。内面胴内面胴部はヘラナデ。	
17 第15図	土師器 甕	竈内 胴部下位～ 底部	① ② 3.5 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	胴部下位は斜めヘラ削り。底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第15図－18 P L19	石器 敲石	床上26cm 完形	長13.8×幅3.1×厚5.9	ひん岩	端部に敲打痕あり	

飯土井上組遺跡3号住居跡

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第19図 P L20	土師器 鉢	床上11cm ¼	① 9.0 ② 1.6 ③ 3.5	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面口縁部は横ナデ、体部は横ヘラ研磨。内面はナデ。	
2 第19図 P L20	土師器 鉢	柱穴P 3 ¼	① 18.6 ② ③ 6.7	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面口縁部は横ナデ、体部から底部にかけてはヘラ削りであるが単位方向は摩滅のため不明。内面は放射状のヘラ研磨。	
3 第19図 P L20	土師器 椀	床上直上 ¼	① 14.0 ② ③ 7.0	①細砂粒 ②酸化焔 ③橙色	外面口縁部は横ナデ、体部から底部は横ヘラ削り。	
4 第19図 P L20	土師器 高杯	柱穴P 3 ¼	① 12.2 ②3.2③7.0 ③ 7.5	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面杯身はヘラ削りであるが摩滅のため単位等は不明。脚部は縦ヘラ削りと端部は横ナデ。内面杯身はヘラ研磨か。	
5 第19図	土師器 器台	床面直上 口縁部片	① 7.6 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③灰黄色	外面口縁部上半は横ナデ、下半はヘラ研磨。	

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製　作・技　法　等　の　特　徴	備　考
6 第19図 P L 20	土師器 器台	床上11cm 口縁部片	①　8.8 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③橙色	外面口縁部上半は横ナデ、下半はヘラ削り。	
7 第19図 P L 20	土師器 器台	床上7cm 脚部片	① ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面はヘラ削りか。	
8 第20図 P L 20	土師器 坩	掘り方 1/4	①　8.2 ②　4.0 ③　6.6	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口縁部は横ナデ、頸部に縦ハケ目が残る。胴部から底部は横ヘラ削り。内面口縁部は横ハケ目(単位不明)、胴部はヘラナデ。	
9 第20図 P L 20	土師器 坩	床面直上 完形	①　7.5 ②　2.4 ③　4.6	①細砂粒(含石英粒) ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面口縁部は横ナデ、胴部はヘラ研磨。内面は全面にヘラ研磨。	
10 第20図 P L 20	土師器 坩	床上11cm 1/4	①　11.2 ② ③　6.0	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	内外面とも摩滅のため整形技法は不鮮明である。	
11 第20図 P L 20	土師器 坩	床面直上 1/4	①　13.6 ②　3.6 ③　7.6	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口唇部は横ナデ、口縁部は縦ハケ目(単位不明)。胴部は横ヘラ削り。	
12 第20図	土師器 坩	床上直上 口縁部片	①　10.0 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	内外面とも口縁部は縦方向のヘラ研磨。	
13 第20図	土師器 坩	床面直上 口縁部片	①　10.8 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	内外面とも摩滅のため整形技法は不鮮明。	
14 第20図	土師器 坩	床上10cm 口縁部片	①　14.0 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③灰黄色	外面口縁部は縦方向のヘラ研磨。	
15 第20図	土師器 坩	床面直上 胴部中位～ 底部片	① ②　3.6 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③明褐灰色	外面胴部は縦ヘラ削り後ヘラ研磨。内面はヘラ研磨。	
16 第20図 P L 20	土師器 坩	床上7cm 胴部から底 部の1/2	① ②　5.8 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③橙色	外面胴部はヘラ削り、底部はヘラ削り。内面の整形技法は不明。	
17 第20図 P L 20	土師器 坩	床上5cm 頸部～胴部	① ②　4.6 ③	①細砂粒 ②酸化焔軟質 ③明褐灰色	外面頸部は縦ハケ目(単位不明)。胴部は横ハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
18 第20図	土師器 壺	床面直上 口縁部片	①　16.8 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	口唇部は粘付。外面口唇部は横ナデ。口縁部は縦ハケ目(7～8単位)。内面は横ナデ。	
19 第20図	土師器 壺	掘り方 口縁部～胴 部上位	①　11.0 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口縁部は横ナデ、胴部の整形技法は摩滅のため不明。内面は部分的に横ハケ目が残る。	
20 第20図 P L 20	土師器 小型甕	床面直上・ 床調 1/4	①　16.0 ②　5.8 ③　10.2	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面口縁部から頸部は横ナデ。胴部は横ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
21 第20図 P L 20	土師器 小型甕	床上26cm 口縁部～胴 部中位片	①　10.4 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③灰黄色	外面口縁部は横ナデ、頸部から胴部上位は縦ハケ目が残る。胴部は横ヘラ削り。内面胴部上位はヘラ研磨、それ以下はヘラナデ。	
22 第20図 P L 20	土師器 小型甕	床上20cm 口縁部～胴 部上位	①　10.4 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③灰黄色	外面口縁部は斜めハケ目(6単位)、胴部は縦ハケ目。内面口縁部は内面ハケ目、胴部は横方向ヘラ研磨。	
23 第20図 P L 20	土師器 甕	床上直上 完形	①　11.4 ②　4.0 ③　14.7	①細砂粒 ②酸化焔 ③灰褐色	外面口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラ研磨、底部はヘラ削り。内面胴部は上半がヘラナデ、下半は縦方向ヘラ研磨。	
24 第20図	土師器 甕	口縁部～胴 部上位片	①　14.8 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面口縁部は横ナデ、頸部から胴部は縦ハケ目(8～10単位)。内面口縁部は横と斜めハケ目、胴部は斜めハケ目(9単位)。	
25 第20図	土師器 甕	掘り方 胴部下位～ 底部片	① ②　4.8 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面胴部は縦ハケ目(10単位か)、底部はヘラ削り。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
26 第20図	土師器	床上直上 胴部下位～ 底部	① ②　4.5 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
27 第20図 P L.20	土師器 甕	床上7cm 口縁部～胴 部上位片	①　12.0 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口縁部は横ナデ、頸部から胴部上位は縦ハケ目(11単位)。	
28 第20図	土師器 台付甕	床上9cm 胴部下位～ 脚部片	① ②　5.6 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面は胴部下位から脚部にかけて縦ハケ目(8～単位)。内面はヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第20図－29 P L.20	石器 砥石	床面直上 端部欠	長6.6×幅3.3×厚2.3	流紋岩 55.9g	自然面が残る。側面に擦痕あり。	
第20図－30 P L.20	石製品 模造品	掘り方 完形	長3.5×幅1.3×厚0.35	硬質凝灰岩	剣形、1孔あり	

4号住居跡

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第25図 P L.21	土師器 杯	床上22cm 口縁部片	①　14.8 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	内外面ともヘラ研磨。	
2 第25図 P L.21	土師器 杯	床上41cm 口縁部片	①　14.1 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	内外面ともヘラ研磨。	
3 第25図 P L.21	土師器 杯	床上49cm 口縁部から 体部片	①　17.2 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	内外面ともヘラ研磨か？	
4 第25図 P L.21	土師器 杯	床上26cm 体部～底部	① ②　2.8 ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	外面体部と底部はヘラ削り。内面は放射状ヘラ研磨。	
5 第25図 P L.21	土師器 器台	床上26cm ほぼ完形	①　7.5 ②2.7④13. 0 ③　8.5	①細砂粒 ②酸化焔 ③淡黄色	脚部に6か所の透孔。外面口縁部は横ナデ、脚部は縦方向ヘラ研磨。内面脚部は上半が横ナデ、下半が横ハケ目(単位不明)。	
6 第25図 P L.21	土師器 坩	床上30cm 完形	①　10.4 ②　2.4 ③　10.1	①微砂粒 ②酸化焔 ③橙色	外面口縁部は縦ヘラ研磨後横ヘラ研磨、胴部上半は横ヘラ研磨、下半は横ヘラ削り。内面口縁部は縦ヘラ研磨、胴部はヘラナデ。	
7 第25図 P L.21	土師器 坩	床上17cm 完形	①　9.9 ②　2.6 ③　10.7	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面は口縁部と胴部上半にヘラ研磨が施されているが単位・方向は不明。胴部下半は縦ヘラ研磨。	
8 第25図	土師器 鉢	床上18cm 胴部～底部 片	① ②　2.1 ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③橙色	外面体部は横ヘラ削り。内面はヘラナデ。	
9 第25図	土師器 鉢	床上39cm 口縁部～体 部片	①　12.2 ② ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口縁部は横ナデ、体部は斜めヘラ研磨。内面頸部は横ヘラ研磨、体部は縦ヘラ研磨。	
10 第26図 P L.21	土師器 壺	床上21cm 口縁部	①　25.0 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③橙色	内面口唇部に凹線が1条巡る。外面口縁部は横ナデ、頸部にヘラ研磨のヘラ先痕が見られる。	
11 第26図 P L.22	土師器 小型甕	貯蔵穴 完形	①　9.6 ②　4.7 ③　10.5	①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ目(14単位)が残る、胴部は縦ヘラ削り、底部ハケ目ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
12 第26図 P L.21	土師器 壺	貯蔵穴 完形	①　14.2 ②　6.0 ③　19.8	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面口縁部は横方向ヘラ研磨、頸部に縦ハケ目が残る。胴部は縦方向ヘラ研磨後横方向ヘラ研磨。底部は粗いヘラ研磨。内面胴部はヘラナデ。	
13 第26図 P L.21	土師器 壺	貯蔵穴 胴部～底部	① ②　6.2 ③	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外側に編み籠の痕跡あり。外面胴部は縦方向ヘラ研磨、内面胴部は横ハケ目(14単位)。	

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
14 第26図 PL22	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部～胴部片	① 15.6 ② ③	①細砂粒 ②微化焔 ③におい黄橙色	内面に輪積痕が残る。外面口縁部は横ナデ、胴部上半は縦ハケ目(11単位)。下半は横ヘラ削り。内面胴部は横ナデ。	
15 第26図 PL22	土師器 台付甕	床上30cm 胴部の一部欠	① 16.1 ②5.8③11.0 ③ 29.0	①微砂粒 ②微化焔 ③明黄褐色	外面口縁部は縦ハケ目(15単位)、胴部上～中位は斜めハケ目後縦ヘラ研磨、下位はヘラ削り。脚部は縦ハケ目。	
16 第27図 PL22	土師器 台付甕	床上19cm 脚部欠	① 13.0 ② 5.5 ③	①細砂粒 ②微化焔 ③明赤褐色	外面口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ目、胴部は斜めハケ目(11単位)。脚部上位は縦ハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
17 第27図 PL22	土師器 台付甕	貯蔵穴 脚部と胴部に一部を欠	① 15.0 ② ③	①細砂粒 ②微化焔 ③におい黄橙色	「S」字状口縁焼。外面口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目(15単位)。内面胴部はヘラナデ。	
18 第27図	土師器 台付甕	床上37cm 口縁部～胴部上位片	① 15.0 ② ③	①細砂粒 ②微化焔 ③灰黄色	「S」字状口縁焼。外面口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目。	
19 第27図	土師器 台付甕	床上59cm 口縁部～胴部上位片	① 14.0 ② ③	①細砂粒 ②微化焔 ③淡黄色	「S」字状口縁焼。外面口縁部は横ナデ、胴部は縦ハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
20 第27図	土師器 台付甕	床上35cm 脚部片	① ② 5.6 ③	①細砂粒 ②微化焔 ③におい橙色	外面は縦ハケ目(単位不明)。内面はヘラナデ。	
21 第27図	土師器 台付甕	貯蔵穴 脚部片	① ②5.6③11.2 ③	①微砂粒 ②微化焔 ③淡黄色	脚部上半は縦ハケ目(10単位)、下半は横ナデ。内面は端部折り返し、縦ナデ。	
22 第27図 PL22	土師器 台付甕	床上20cm 胴部下位～脚部	① ②5.3③9.4 ③	①細砂粒 ②微化焔 ③におい黄橙色	外面は胴部から脚部上位にかけて縦ハケ目(13単位)、脚部下半は横ナデ。脚部内面は横ナデ。	
23 第27図 PL22	土師器 壺	貯蔵穴わきほぼ完形	① 15.7 ② 7.4 ③ 29.0	①細砂粒 ②微化焔 ③におい橙色	外面口唇部は横ナデ、口縁部から胴部にかけては縦ハケ目(11単位)。胴部はハケ目後縦なヘラ研磨、底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

5号住居跡

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第28図 PL23	土師器 坩	床上7cm 完形	① 9.2 ② 2.7 ③ 6.8	①微砂粒 ②微化焔 ③橙色	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

1号土坑墓

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第32図 PL23	陶器 鬼皿	完形	① 13.2 ②7.6③7.5 ③ 3.6	①白色粒子、微砂粒 ②還元焔 ③灰色	型押し、成形。内面に目跡が3カ所残る。外面底部を除いて透明感ある淡緑色釉を施釉。	瀬戸・美濃窯、17C.代
2 第32図 PL23	陶器 皿	完形	① 13.1 ②8.2③6.7 ③ 2.9	①微砂粒 ②還元焔 ③灰白色	高台は削り出し。内面に底接重ね焼き痕が残る。施釉は灰釉を内面全面と外面口縁部に掛け掛け。	瀬戸・美濃窯、17C.代

挿図番号	図版番号	銭名	量 目(外径×輪径×郭)mm	特徴
第32図－3	PL23	至和元寶	24.0×1.3×8.0	
第32図－4	PL23	洪武通寶	23.3×1.1×7.3	
第32図－5	PL23	寛永通寶	24.7×2.3×6.0	裏面に「×」の背文
第32図－6	PL23	寛永通寶	24.7×1.7×6.4	裏面に「文」の背文
第32図－7	PL23	寛永通寶	24.4×2.0×6.4	
第32図－8	PL23	寛永通寶	24.3×1.7×6.0	裏面に「文」の背文
第32図－9	PL23	寛永通寶	23.7×1.7×6.6	
第32図－10	PL23	寛永通寶		
第32図－11	PL23	寛永通寶	24.2×2.0×6.5	

遺物観察表

Ⅰ区4号土坑

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1・2 第35図 P L.24	縄文土器 深鉢	胴部中位欠	① 38.0 ② 8.0 ③	①粗砂粒 ②酸化焔硬質 ③黄褐色		

Ⅴ区2号井戸

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第41図－1 P L.24	石製品 砥石	底面 完形	長53.9×幅38.8×厚22.7	角閃石安山岩	上面に19×18cm、深さ2cmの柱受け の凹あり。	

Ⅱ区2号溝

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第43図－1 P L.25	石器 砥石	端部欠	長8.0×幅4.25×厚3.2	流紋岩 111.0g	各面に擦痕あり。	
第43図－2 P L.25	石製品 多孔石	完形	長12.3×幅6.9×厚6.6	粗粒安山岩 635.0g	表裏、側面に小孔あり。	
第43図－3 P L.25	石製品 石鉢	口縁部片		粗粒安山岩	片口、内外面に加工痕あり。	

Ⅲ区1号・2号溝

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第44図－1 P L.25	石製品 模造品	Ⅲ区1号溝 完形	長3.5×幅1.3×厚0.35	流紋岩 3.0g	楕形、上位に径1mmの小孔が2カ所あり。	

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
2 第44図 P L.25	陶器 小鉢	2号溝 1/4	① 10.2 ②5.8③5.5 ③ 2.8	①緻密 ②還元焔 ③白色	筆による絵付け	
3 第44図 P L.25	陶器 皿	2号溝 1/4	① ②5.8③5.5 ③	①緻密 ②還元焔 ③白色	印判による絵付け	
4 第44図 P L.25	陶器 茶椀	2号溝 底部片	① ②7.4③3.8 ③	①緻密 ②還元焔 ③白色	内面底部にイモ判	

Ⅴ区1号溝

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第45図 P L.25	土師器 高杯	砂礫層 杯身底部片		①細砂粒 ②酸化焔 ③褐色	外面はヘラ削りであるが摩滅のため単位・方向不明。内面は凹凸が激しい。	
2 第45図 P L.25	土師器 高杯	脚部片		①細砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	内面に輪積痕が残る。外面は縦ヘラ削りか。内面は脚部が横ナデ、裾部は上半が横ハケ目、下半は横ナデ。	
3 第45図 P L.25	土師器 高杯	脚部	杯身底部径 3.0 裾径 11.0	①微砂粒 ②酸化焔 ②浅黄色	内面に輪積痕が残る。外面は脚部が縦ヘラ削り、裾部は横ナデ。内面は横ナデ。	
4 第45図 P L.25	土師器 高杯	脚部片		①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	外面は縦ヘラ削り。内面は縦ナデ、裾部は横ナデ。	
5 第45図 P L.25	土師器 高杯	脚部	杯身底部径 3.3 裾径 10.0	①微砂粒 ②酸化焔 ③橙色	内面に輪積痕が残る。外面は脚部は縦ヘラ削りか。裾部は横ナデ。内面は脚部が横ヘラナデ、裾部は横ハケ目(12単位)。	
6 第45図	土師器 坩	胴部片	頸径 5.3 胴部最大径 8.6	①微砂粒 ②酸化焔 ③浅黄色	外面は斜めヘラ削り。内面はヘラナデ。	
7 第45図 P L.25	土師器 坩	口縁部下位 ～胴部片	頸径 6.8 胴部最大径 14.0	①微砂粒 ②酸化焔やや軟質 ③浅黄色	外面は口縁部が横ナデ、胴部は横ヘラ削りであるが単位等は不明。内面はヘラナデ。	

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
9 第45図 PL25	土師器 手捏ね土器	完形	① 7.2 ② ③ 5.4	①微砂粒 ②酸化焔 ③明黄褐色	内外面に指頭痕が残る。	
8 第45図	須恵器 長頸瓶	胴部上位片		①細砂粒 ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転方向不明。外面胴部上位に自然釉が付着。	

V区3号溝

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第46図 PL25	土師器 杯	1/4	① 11.8 ② 8.0 ③ 2.9	①粗砂粒 ②酸化焔 ③にぶい橙色	口縁部は横ナデ。	

V区4号溝

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第47図	瓦和陶器 椀	底部片	① ②8.2③7.8 ③	①微砂粒 ②還元焔 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付。底部は回転ナデ。	

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	石材 重量	製作技法等の特徴	備考
第47図－2 PL25	石製品 鉢	口縁部片		粗粒安山岩	片口。内外面に加工痕が残る。	

Ⅳ区1号畠

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第48図 PL26	土師器 皿台	脚部上位片	脚部上部径 2.9	①微砂粒 ②酸化焔 ③橙色	脚部中位に円形の透孔を1対もつ。外面は縦ヘラ研磨。内面はナデ。	
2 第48図 PL26	土師器 小型壺	口縁部～胴部上位片	① 11.0	①微砂粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙色	口縁部は横ナデ、頸部はハケ目が残る、胴部は横ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

V区2号畠

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備考
1 第50図 PL26	須恵器 杯	口縁部～底部片	① 13.6 ② 8.0 ③ 3.0	①細砂粒 ②還元焔 ③灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切りか。	

飯土井上組遺跡遺構外出土石器

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	量目 (長さ×幅×厚さ)	石材 重量	製作技法等の特徴	備考
第51図－1 PL26	石器 打製石斧	Ⅰ区 完形	10.7×5.0×1.0	黒色頁岩 53.0g	短冊形	
第51図－2 PL26	石器 打製石斧	Ⅱ区 完形	12.2×4.1×1.3	黒色頁岩 61.0g	短冊形	
第51図－3 PL26	石器 石鏃	Ⅲ区 ほぼ完形	3.0×1.8×0.7	黒色頁岩 1.90g	凹基有茎、先端部・茎を損	
第51図－4 PL26	石器 石鏃	Ⅱ区 ほぼ完形	1.75×1.4×0.3	黒曜石 0.52g	凹基無茎、片脚欠損	局部磨製？
第51図－5 PL26	石器 石鏃	Ⅰ区 一部欠	(2.2)×1.6×0.5	チャート 1.14g	凹基無茎、先端・茎を欠損	
第51図－6 PL26	石器 石鏃	Ⅱ区 ほぼ完形	(2.45)×1.3×0.6	チャート 0.99g	凹基無茎、先端を僅かに欠損	
第51図－7 PL26	石器 削器	Ⅱ区 1/2	6.2×(7.8)×1.9	黒色頁岩 76.0g	中央よりやや左側を欠損	
第51図－8 PL26	石器、使用 痕のある剥片	Ⅰ区 完形	6.5×5.0×1.5	頁岩 41.0g	一部自然面が残る。	

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　　目	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第51図－9 P L.26	石器、加工痕のある剥片	I 区 完形	5.1×7.2×2.1	黒色頁岩 55.0g		
第51図－10 P L.26	石器、使用痕のある剥片	I 区	(4.4)×(4.0)×1.1	頁岩 17.0g	一部自然面が残る。	
第51図－11 P L.26	石製品 板碑	III区 破片		緑泥片岩	加工痕跡あり	
第51図－12 P L.26	石製品 板碑	III区 破片		緑泥片岩	加工痕跡あり	
第52図－13 P L.26	石器 磨石	II 区 1/2	(9.2)×(8.0)×4.3	石英閃緑岩		
第52図－14 P L.26	石器 磨石	I 区 完形	17.5×13.1×4.0	粗粒安山岩 1314.0g	表裏面に敲打痕あり	

飯土井上組遺跡遺構外出土土器・鉄器

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第53図 P L.27	土師器 杯	口縁部片	①　12.2 ② ③	①粗砂粒 ②酸化焔 ③橙色	口縁部上半は横ナデ、下半はヘラ削りであるが摩滅のため単位等は不明。	
2 第53図 P L.27	土師器 小型甕	ほぼ完形	①　7.8 ②　4.2 ③　7.2	①細砂粒 ②酸化焔 ③におい橙色	外面は口縁部から頸部が横ナデ、胴部中程がヘラナデ、底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
3 第53図 P L.27	軟質陶器 甕	口縁部片	①　37.8 ② ③	①細砂粒 ②酸化焔 ③褐色	口縁部横ナデ。	

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　　目	製作技法等の特徴	備　考
第53図－4 P L.27	鉄器 鎌	ほぼ完形	17.5×3.0×0.6	基部を強かに 欠損	
第53図－5 P L.27	鉄器 鎌	破片	(16.0)×2.6×0.5	両端を欠損	

波志江中峰岸遺跡水田出土遺物

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　目	①胎土②焼成③色調	製作技法等の特徴	備　考
1 第59図 P L.34図	軟質陶器 鉢	II 区 口縁部片		①細砂粒 ②還元焔 ③褐色	片口か。	

挿図番号	図版番号	載 貨 名	出土位置	量　目(外径×軸幅×郭)	特　　徴	備　考
第59図－2	P L.34	熊平元寶	I 区	2.27×0.26×0.6cm		

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　　目 (長さ×幅×厚さ)cm	製作技法等の特徴	備　考
第59図－3	鉄器 釘	III区	(6.6)×0.35×0.4	両端を欠損	

波志江中峰岸遺跡遺構外出土石器

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 遺存状態	量　　目 (長さ×幅×厚さ)cm	石　材 重　量	製作技法等の特徴	備　考
第60図－1 P L.34	石器 三角錐形	I 区 一部欠	(10.9)× 5.2× 5.4	黒色頁岩 (484.0)g 上半部を欠損		
第60図－2 P L.34	石器 石斧	II 区 完形	2.8× 1.6× 0.6	チャート 2.0g	凹基有茎	
第60図－3 P L.34	石器 三角錐形	I 区 1/2	(9.1)× 5.9× 5.0	黒色頁岩 (257.0)g		
第60図－4 P L.34	石器 スタンプ形	I 区 一部欠	7.5× 6.8× 4.8	ひん岩 (356.0)g	上半部を欠損	
第60図－5 P L.35	石器 尖頭器	I 区 破片	(3.9)× 1.8× 1.0	黒色頁岩 (7.0)g	両端部欠損	

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	法量	石材 重量	製作技法等の特徴	備考
第60図－6 P L.34	石器 三角錐形	I区 完形	13.7× 8.6× 4.8	黒色頁岩 575.0g	裏面と片側面に自然面が残る。	
第60図－7 P L.34	石器 削器	I区 1/2	(3.8)× 3.0× 1.3	黒色頁岩 (16.0)g	下半部を欠損	
第60図－8 P L.34	石器 削器	I区 3/4	(4.3)×(5.2)× 1.8	黒色頁岩 (39.0)g	周端部を欠損	
第61図－9 P L.34	石器 削器	III区 完形	5.7× 8.4× 1.9	黒色頁岩 92.0g	一部に自然面が残る。	
第61図－10 P L.34	石器 加工痕のある石器	I区 完形	7.0× 7.1× 1.7	灰色安山岩 103.0g	表面の一部に自然面が残る。	
第61図－11 P L.35	石器 加工痕のある石器	I区 完形	7.9× 4.15× 2.4	黒色頁岩 63.0g		
第61図－12 P L.34	石器 加工痕のある石器	I区 完形	9.1× 7.2× 2.5	黒色頁岩 218.0g		
第61図－13 P L.34	石器 加工痕のある石器	II区 完形	9.1× 7.1× 2.15	黒色頁岩 132.0g	片面は自然面。	
第61図－14 P L.35	石器 使用痕のある石器	III区 ほぼ完形	(9.15)× 5.6× 2.05	黒色頁岩 (78.0)g	一部に自然面が残る。	
第61図－15 P L.35	石器 使用痕のある石器	I区 完形	6.7× 2.5× 1.1	黒色頁岩 15.0g	一部に自然面が残る。	
第61図－16 P L.35	石器 磨器	I区 完形	7.0× 7.3× 4.2	変質玄武岩 262.0g	両面と片側面に自然面が残る。	
第61図－17 P L.35	石器 使用痕のある石器	I区 完形	8.0× 7.65× 2.1	黒色頁岩 148.0g	片面に自然面が残る。	
第61図－18 P L.35	石器 使用痕のある石器	I区 完形	7.4× 6.9× 1.2	頁岩 58.0g	片面は自然面。	
第61図－19 P L.35	石器 石皿	I区 破片	(7.4)×(8.2)×(3.8)	粗粒安山岩 (171.0)g		

発掘調査報告書抄録

フリガナ	イイドイカミグミイセキ　ハシエナカミネギシイセキ
書名	飯土井上組遺跡　波志江中峰岸遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番号	第182集
編集者	神谷佳明
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377　群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784－2
発行年	西暦　1995年2月28日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯土井上組 （イイドイカミグミ）	前橋市飯土井町上組 （マエバシシイイドイ マチカミグミ）	102016		36°21′40	139°11′10″	19851201 19860630	20,000	道路建設
波志江中峰岸 （ハシエナカミネギシ）	伊勢崎市波志江町中峰岸 （イセサキシハシエマチカミネギシ）	102041		36°21′30	139°11′20″	19850918 19851130	8,400	

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
飯土井上組	居住	古墳	竪穴住居	4	土師器(杯、高杯、器台、甕) 石製模造品	前期～中期
		平安	竪穴住居	2	土師器(杯、甕) 須恵器(杯、椀、長頸壺)	
	墓	近世	墓坑	1	陶器(菊皿、灰釉皿) 銭貨(洪武通寶、寛永通寶)	
	生産	中世・近世	畠	3		
	貯蔵	縄文	埋甕	1	深鉢(加曽利E３)	
波志江中峰岸	生産	平安	水田	1		As-B 層下

写　真　図　版

遺跡地周辺航空撮影

遺跡全景(Ⅰ～Ⅴ区)

Ⅲ区　1号住居跡

Ⅲ区　1号住居跡遺物出土状態

Ⅲ区　1号住居跡土層断面

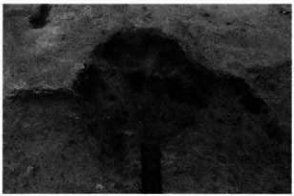
Ⅲ区　1号住居跡カマド

Ⅲ区　1号住居跡カマド土層断面

Ⅲ区　2号住居跡

Ⅲ区　2号住居跡遺物出土状態

Ⅲ区　2号住居跡遺物出土状態



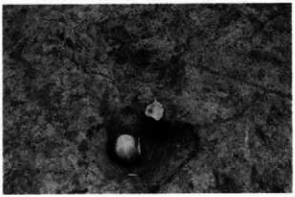
Ⅲ区　2号住居跡カマド掘り方

Ⅲ区　2号住居跡旧カマド掘り方

IV区　3号住居跡

IV区　3号住居跡掘り方

IV区　3号住居跡遺物出土状態



IV区　3号住居跡遺物出土状態

IV区　3号住居跡貯蔵穴土層断面

IV区　4号住居跡

IV区　4号住居跡土層断面

IV区　4号住居跡土層断面

IV区　4号住居跡掘り方

IV区　4号住居跡掘り方土層断面

IV区　4号住居跡遺物出土状態

IV区　4号住居跡遺物出土状態

IV区　4号住居跡遺物出土状態

IV区　4号住居跡遺物出土状態

IV区　4号住居跡遺物出土状態

IV区　4号住居跡遺物出土状態

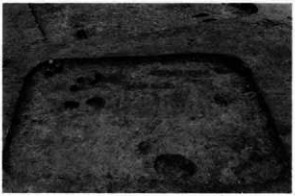
IV区　4号住居跡焼土断面

IV区　4号住居跡焼土断面

IV区　5号住居跡

IV区　5号住居跡土層断面

IV区　5号住居跡土層断面



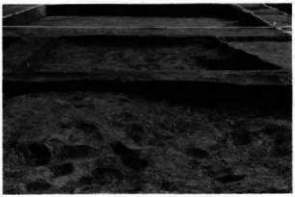
IV区　5号住居跡遺物出土状態

IV区　4号住居跡・5号住居跡

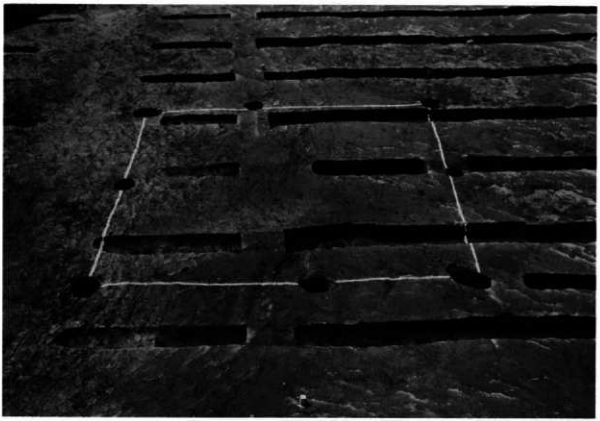
IV区　6号住居跡(東→)

IV区　6号住居跡(南→)

IV区　6号住居跡土層断面



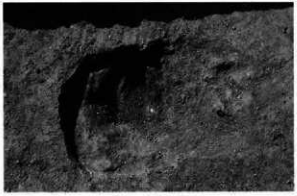
IV区　6号住居跡土層断面



IV区　1号掘立柱建物跡

IV区　1号土坑墓

Ⅰ区　1号土坑



Ⅰ区　2号土坑

Ⅰ区　3号土坑

Ⅰ区　4号土坑

Ⅱ区　1号土坑

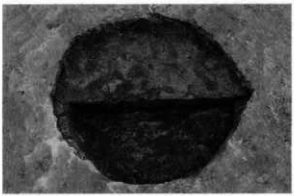
Ⅲ区　1号土坑

Ⅲ区　2号土坑

Ⅳ区　土坑群全景

Ⅳ区　1号土坑

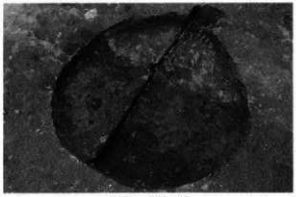
Ⅳ区　2号土坑



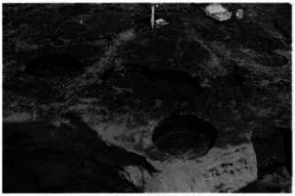
Ⅳ区　3号土坑

Ⅳ区　4号土坑

Ⅳ区　5号土坑

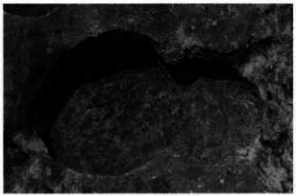


Ⅳ区　6号土坑



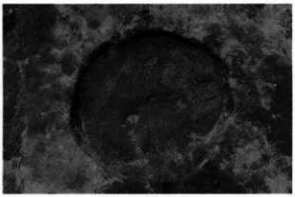
Ⅴ区　土坑群全景

Ⅴ区　1号土坑



V区　2・3号土坑

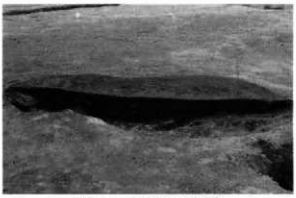
V区　4号土坑



V区　5号土坑

V区　6号土坑

V区　7・8号土坑



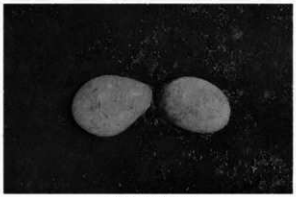
V区　7・8号土坑土層断面

Ⅳ区　1号集石

Ⅳ区　2号集石

IV区　3号集石

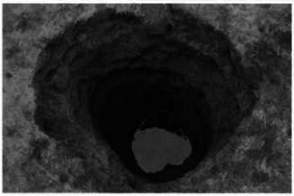
IV区　5号集石



IV区　7号集石

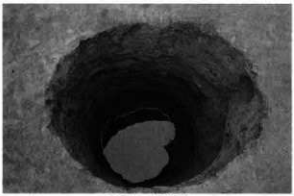
IV区　1・2・3号集石

IV区　集石群全景



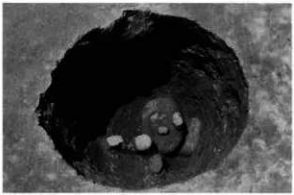
V区　1号井戸

V区　1号井戸土層断面



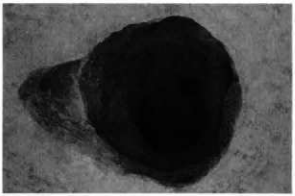
V区　2号井戸

V区　2号井戸土層断面



V区　2号井戸遺物出土状態

V区　2号井戸遺物出土状態



V区　3号井戸

V区　3号井戸土層断面

Ⅰ区　1号溝

Ⅰ区　2号溝

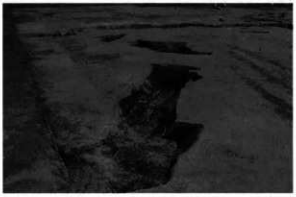
Ⅱ区　1号溝

Ⅱ区　2号溝

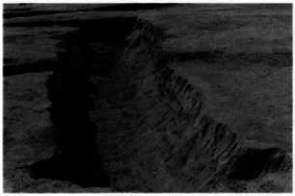
Ⅲ区　1・2号溝全景

V区 1号溝

V区 1号溝



V区 2号溝



V区 3号溝

V区 4号溝

Ⅳ区　畠

Ⅴ区　1号畠

Ⅴ区　2号畠

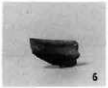
1号住居跡

2号住居跡

14

3 号住居跡

1


6

8

7

9

2

20

10

3

11

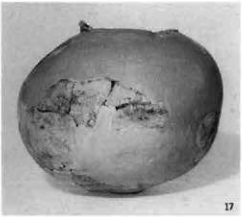
4

16

23

22

21


17

29

30

30

27

4号住居跡

1

2

3

4

5

6

7

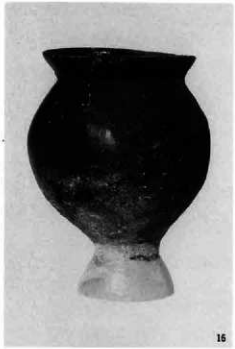
10

12

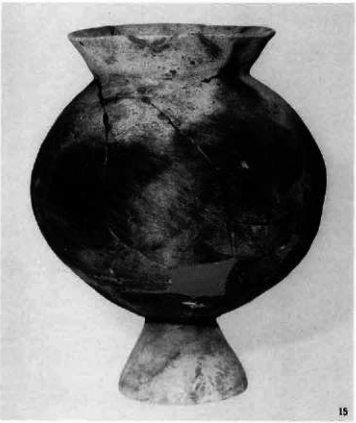
13

11

14

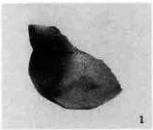

16

22

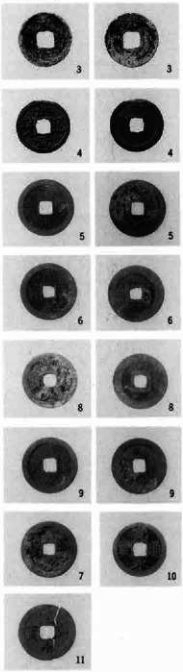

15

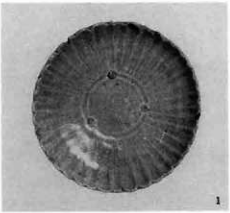
17

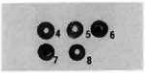
5号住居跡

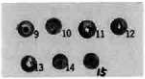


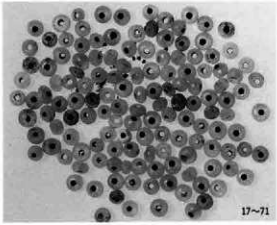
1号土坑墓











I区4号土坑

V区2号井戸

II区　2号溝

1

1

3

2

3

III区　1号溝

1 1

2

3

4

V区　1号溝

1

4

2

5

3

9

7

V区　3号溝

1

V区　4号溝

2

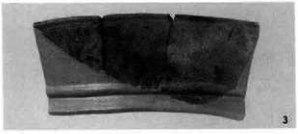
IV区　1号畠跡

V区　2号畠跡

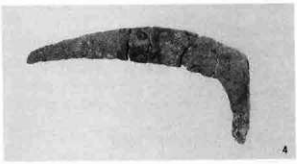
遺構外

1

2


3

5


4

調査区全景(広範囲)

調 査 前 状 況

調査区全景(狭範囲)

II区　6・7・8号溝

II区　9号溝

II区　11号溝

III区　12・13号溝

Ⅰ区　水田跡全景

Ⅱ区　水田跡全景

Ⅰ区　水田跡1～3畦

Ⅰ区　水田跡1～3畦

Ⅰ区　水田跡1～3畦

Ⅱ区　水田跡畦

Ⅱ区　水田跡畦

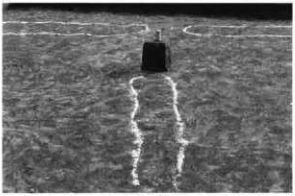
Ⅱ区　水田跡6畦

Ⅱ区　水田面

Ⅱ区　水田面

Ⅲ区　水 田 跡

Ⅲ区　水田跡９畦

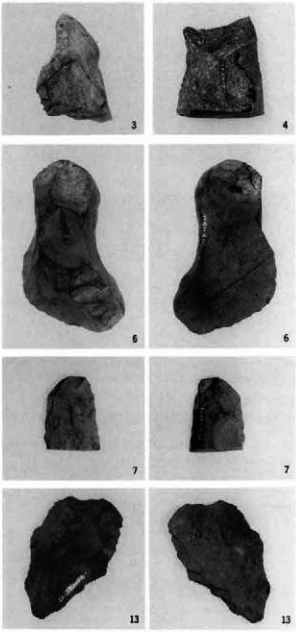


Ⅲ区　水田跡10畦

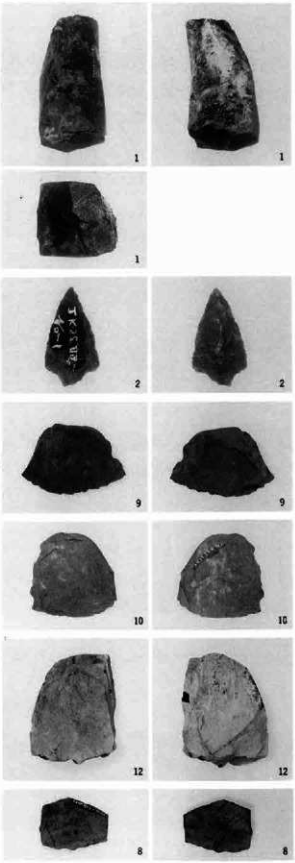
Ⅲ区　水田跡11畦

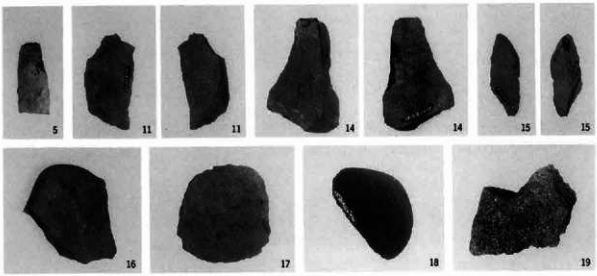
Ⅲ区　水田面

Ⅰ～Ⅲ区水田跡



遺構外

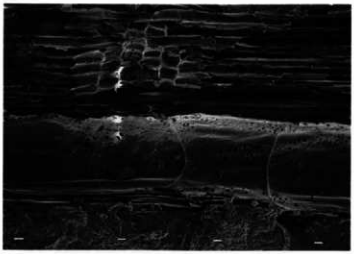



5
11
11
14
14
15
15
16
17
18
19

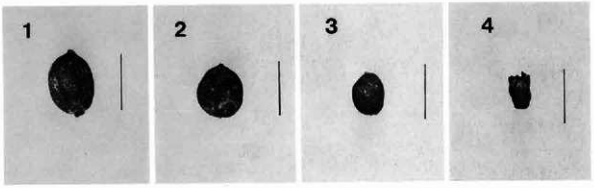
PL 36 図版　飯土井上組遺跡出土炭化材の樹種顕微鏡写真

1a. ケンポナシ属（横断面）bar:0.1mm

1b. 同（接線断面）bar:0.1mm



1c. 同（放射断面）bar:0.1mm



図版　飯土井上組遺跡植物遺体

1～4 不明植物遺体（スケールは1cm）

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
調 査 報 告 第 102 集

飯土井上組遺跡
波志江中峰岸遺跡

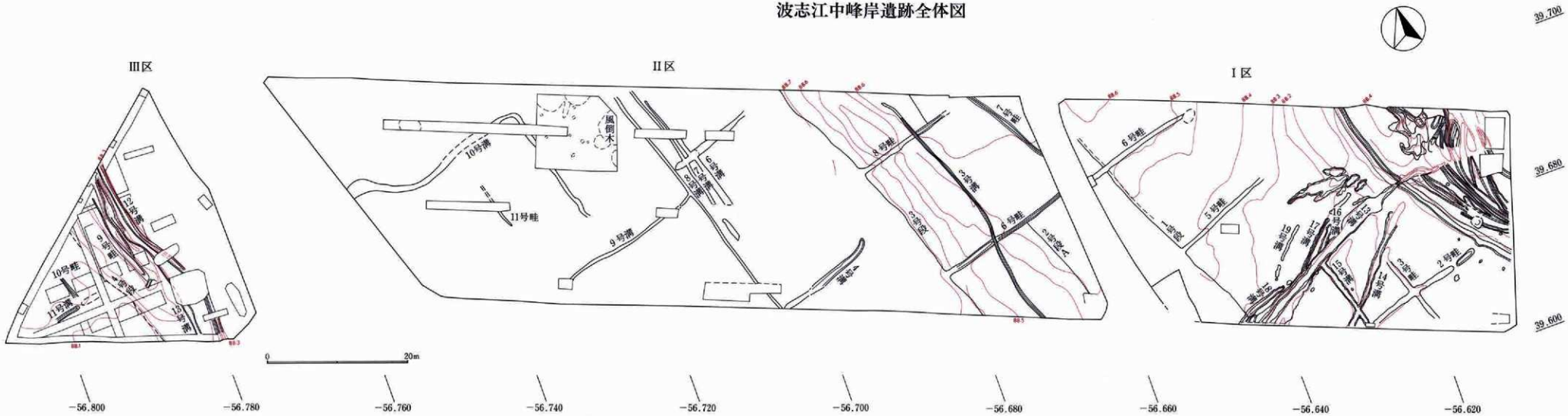
一般国道17号（上武道路）改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年2月20日 印刷
平成7年2月28日 発行

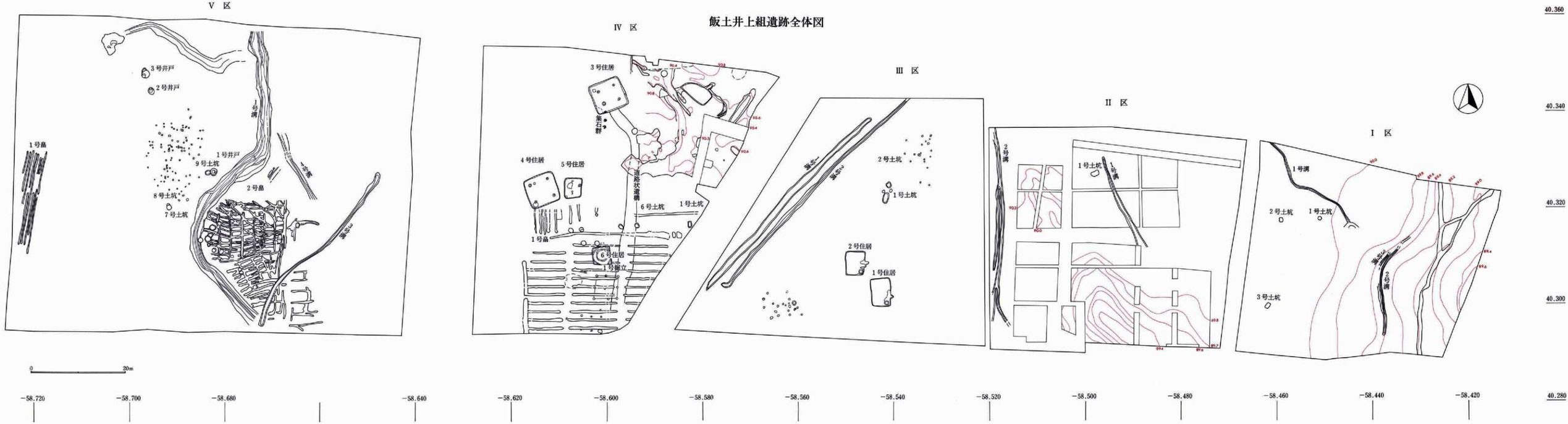
編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52−2511（代表）

印刷／朝日印刷工業株式会社

波志江中峰岸遺跡全体図



飯土井上組遺跡全体図


V 区
3号井戸
2号井戸
1号溝
1号畠
1号井戸
9号土坑
2号畠
8号土坑
7号土坑
溝状遺構
0
20m
IV 区
3号住居
焦石群
4号住居
5号住居
道路状遺構
6号土坑
1号土坑
1号畠
6号住居
1号掘立
III 区
溝状遺構
2号土坑
1号土坑
2号住居
1号住居
II 区
2号溝
1号土坑
1号溝
I 区
1号溝
2号土坑
1号土坑
溝状遺構
3号土坑
40.360
40.340
40.320
40.300
40.280
−58.720
−58.700
−58.680
−58.640
−58.620
−58.600
−58.580
−58.560
−58.540
−58.520
−58.500
−58.480
−58.460
−58.440
−58.420